内　山　瓦　窯

第４次発掘調査概報

１９９６．３

大和郡山市教育委員会

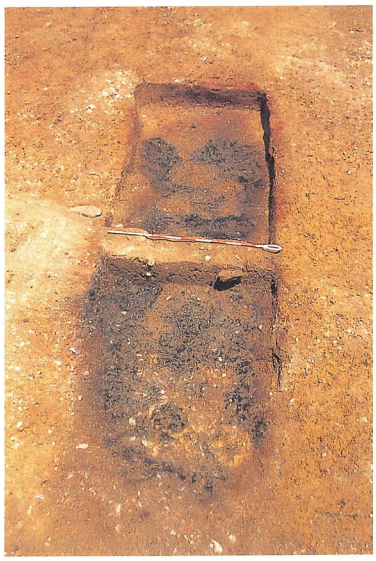
内　山　瓦　窯

第４次発掘調査概報

１９９６．３

大和郡山市教育委員会

SD－03（東より）



SK－01（南より）

例　言

1　本書は、大和郡山市西田中町115で実施した発掘調査（範囲確認調査）の概要報告書である。

2　調査は、平成７年度国庫補助事業（範囲確認調査）として実施した。調査期間、調査面積は下記の通りである。

調査期間

平成７年７月24日～同８月31日。

調査面積

約570㎡（対象面積約900㎡）。

3　調査は、以下の組織で実施した。

現地調査

調査員：山川　均（大和郡山市教育委員会　技術吏員）。
補助員：伊藤雅和、宇田員将、関広尚世（以上奈良大学）、武田浩子。
作業員：市井義治、金浜昭八、北村幸信、杉岡雪子、谷渕喜一、堀川正治。

事　　務

大和郡山市教育委員会　社会教育課（課長　半田義次）。

4　本書は、以下の分担で作成した。

製図・拓本

伊藤、宇田、関広、武田、山川。

写真撮影・執筆・編集

山川。

5　本書で使用した図23原図（断面実測図）は、花谷浩氏（奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部）によるものである。なお、同氏には図面のトレース・レイアウトその他につき、貴重なご教示を頂いた。また、図２・３で使用した写真は牛嶋茂氏（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部）の撮影によるものである。

本文目次

Ⅰ　序章
　1　内山瓦窯における既往の調査について……1
　2　内山瓦窯の環境
　（1）地理的環境……3
　（2）歴史的環境……6
Ⅱ　調査の概要
　1　第4次調査の目的と経過……8
　2　遺構
　（1）SD－03……10
　（2）3号窯……10
　（3）4号窯……13
　（4）SK－01……13
　（5）SK－02……14
　（6）SK－03……16
　（7）SK－04……16
　（8）SK－05……16
　（9）SK－06……18
　（10）SK－07……18
　3　遺物
　（1）SD－03出土屋瓦……18
　（2）SK－07出土土師器……22
Ⅲ　まとめ（窯体の分布状況に関する所見）……23

図表目次

図1　大和郡山市の位置
図2　内山1号窯及2号窯……1
図3　内山1号窯内部……2
図4　内山1号窯前面大溝SD－04（西より）……2
図5　内山瓦窯の位置及周辺の遺跡（S：1／50,000）……4
図6　神ノ木遺跡 SX－01（北より）……5
図7　来光遺跡 SB－01（北より）……5
図8　来光遺跡出土平瓦……5
図9　調査前の状況（北東より）……8
図10　重機掘削……9
図11　実測……9
図12　完掘状況（南西より）……9
図13　検出遺構全体平面図（S：1／100）……11～12
図14　SD－03土層断面図（S：1／20）……10

図15　３号窯平面図及断面図（Ｓ：１／20）……13
図16　SK－01平面図及土層断面図（Ｓ：１／20）……14
図17　SK－02平面図及土層断面図（Ｓ：１／20）……15
図18　SK－03平面図及土層断面図（Ｓ：１／20）……15
図19　SK－04平面図及土層断面図（Ｓ：１／20）……16
図20　SK－05平面図及土層断面図（Ｓ：１／20）……16
図21　SK－06平面図及土層断面図（Ｓ：１／20）……17
図22　SK－07平面図及土層断面図（Ｓ：１／20）……17
図23　内山瓦窯出土軒丸瓦拓影及実測図（Ｓ：１／４）……18
図24　SD－03出土丸瓦実測図及拓影（Ｓ：１／６）……19
図25　SD－03出土平瓦実測図及拓影（Ｓ：１／６）……21
図26　SD－03出土面戸瓦・熨斗瓦実測図及拓影（Ｓ：１／６）……22
図27　SD－03出土瓦の窯記号拓影（Ｓ：１／４）……22
図28　SK－07出土土師器実測図（Ｓ：１／４）……23
図29　１号窯における「階」の位置想定図……24
図30　主要遺構の位置概念図（Ｓ：１／400）……24

表１　内山瓦窯の周辺遺跡一覧表……5
表２　軒丸瓦観察表……27
表３　丸瓦観察表……27
表４　平瓦観察表……28
表５　面戸瓦観察表……28
表６　熨斗瓦観察表……28

図版目次

図版１　１　SD－03上層遺物出土状況（東より）
　　２　同上　下層遺物出土状況（西より）
図版２　１　SD－03下層遺物出土状況（北より）
　　２　同上　完掘状況（西より）
図版３　１　３号窯上半部分検出状況（南より）
　　２　同上　焼成部階段の状況（東より）
図版４　１　４号窯煙道周辺（南より）
　　２　SK－01完掘状況（北より）
図版５　１　SK－02完掘状況（南より）
　　２　SK－04遺物出土状況（南より）
図版６　１　SK－06遺物出土状況（北より）
　　２　SK－07遺物出土状況（南より）
図版７　軒丸瓦

図版８　軒丸瓦・軒平瓦
図版９　丸瓦
図版10　平瓦
図版11　平瓦・面戸瓦
図版12　熨斗瓦
図版13　窯記号・土師器

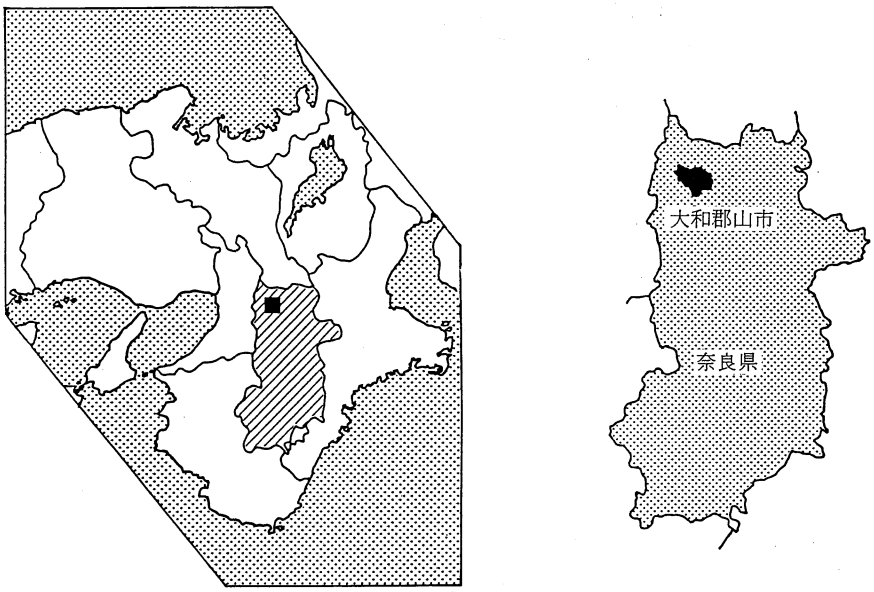


図１　大和郡山市の位置

Ⅰ 序　　章

1　内山瓦窯における既往の調査について

内山瓦窯は、大和郡山市西田中町に所在する、７世紀末葉（白鳳時代）の藤原宮所用瓦焼成瓦窯跡である。西田中町には、昭和６年（1931）に京谷康信によって発見された西田中瓦窯が存在するが[1]、内山瓦窯はその南西約270mに位置している。両瓦窯は瓦笵を共有するなど密接な関係を持つが、瓦の製作技法などの共通性は、西田中瓦窯における出土瓦がごく少数しか現存しないため、現在のところ詳細不明である[2]。

ところでこの内山瓦窯は、平成５年（1993）に行われた試掘調査（小集落改良事業に伴う）によって新たに発見された遺跡である[3]。この時存在が確認された窯体は、（内山瓦窯）１号窯と命名された。なお、１号窯は周辺に半円形の周溝（SD－01）を持つこともその時の調査で判明した（第１次調査）。その後、同年～翌年にかけて実施された周辺の範囲確認調査（第２次調査）において、１号窯の東にもう１基瓦窯が存在すること（２号窯）、さらにその窯がやはり半円形の周溝を持つこと（SD－02）などが判明した。また、２号窯の周溝に接続する直線的な溝（SD－03）も検出された（図２）。なお、この時の調査では１号窯の西には瓦窯は分布しないこと、また対面する丘陵上にも瓦窯など、７世紀代の遺跡は存在しないことなどが確認された。

以上の調査所見を受け、大和郡山市教育委員会では平成６年（1994）３月～６月にかけて、１号窯の窯体部分およびその前面部分の調査を実施した（第３次調査）。調査の結果、本窯が地山をくりぬいて造られた地下式登窯（窖窯）で、天井部の一部は崩落するものの、全体的に見て非常に良好に遺存することが判明した（図３）。内部（焼成部）には瓦積みの階段があり、段数は瓦の乱積みのため明瞭ではないが（この調査では遊離した個体以外の瓦は一切取り上げなかった）、14～16段程度と思われる。焼成部の長さ（斜面長）は約４ｍ（平面長約3.5m）、傾斜は約31°である。煙道部は窯の奥壁から垂直に立ち上がるもので、現存の長さは約1.5mであ

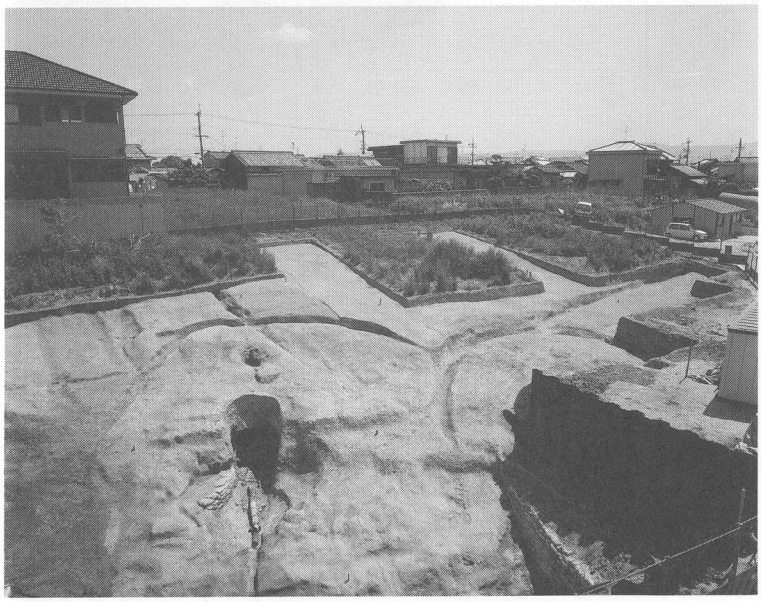


図２　内山１号窯（左）及２号窯（右）（牛嶋茂氏撮影）

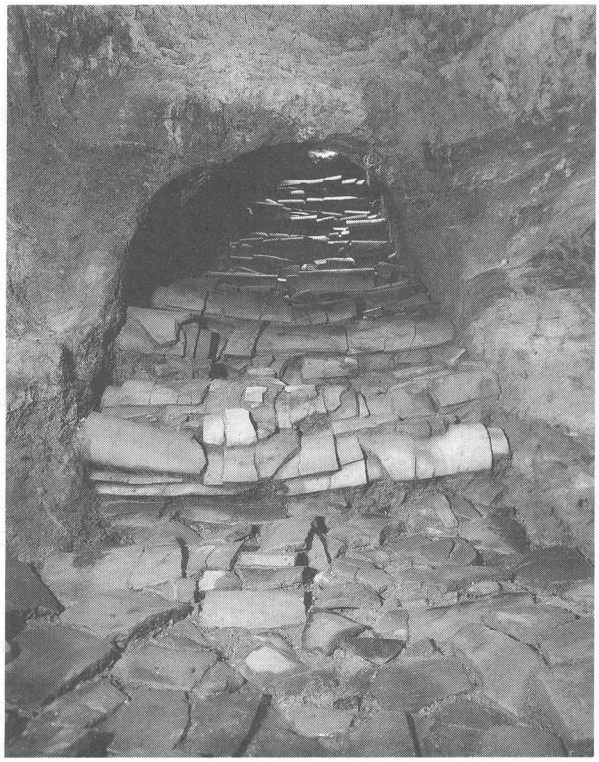


図３　内山１号窯内部（牛嶋茂氏撮影）

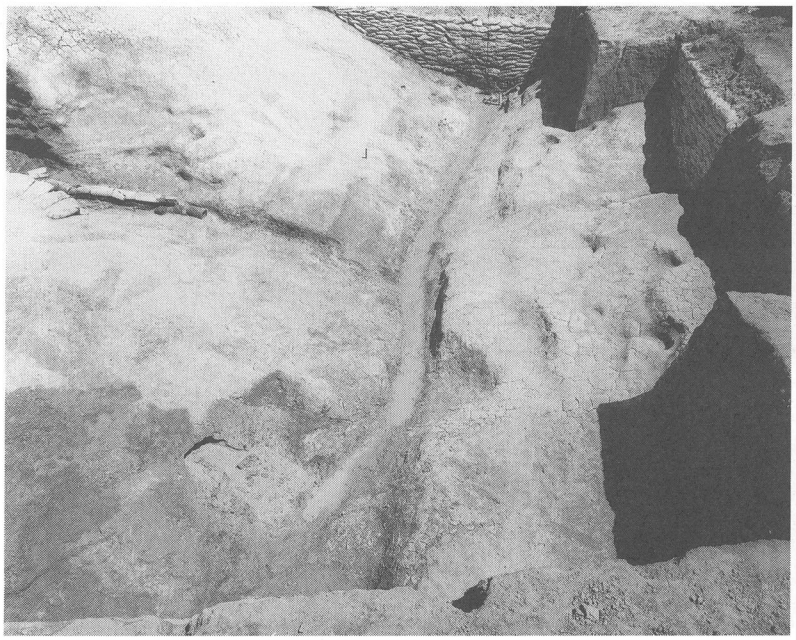


図４　内山１号窯前面大溝SD－04（西より）

る。

燃焼部は長方形に瓦の砕片を敷き詰めたもので、長さ約1.2m、幅は最大で約1.3mを測るものであった。なお、ここから窯の前庭部にかけては、丸瓦を伏せた状態で6個体繋いだ排水施設が見られたが、この排水施設に関しては3回の造り替えがあった。

また、1号窯の前面部分の調査では、従来の瓦窯のイメージを覆すような所見が得られた。本窯の前面からは、幅約3.5m、深さ約90cmの大溝（SD－04）が検出された（図4）。また、この大溝から1号窯前庭部までの距離が近接していることから、本窯の場合、通常の窯跡において見られるような灰原が形成されていない（灰原を形成するスペースが足りない）。なお、こうした事実に関わる考察については、先に1号窯の概報で行っているので参照されたい。

その他の周辺施設については、1号窯の山側を半円形に取り巻くように周溝（SD－01）がある。このSD－01は2号窯の周溝（SD－02）に取り付いており（図30参照）、その先後関係は、一般的に考えるならばSD－02→SD－01ということになろう（第Ⅲ章参照）。また、直線溝SD－03については、SD－01と同様にSD－02より発している。

なお、これらの調査を通じては、多量の瓦が出土している。なかでも本窯で生産された藤原宮所用の軒瓦に関しては、軒丸瓦が6281Ba型式、軒平瓦が6641F型式であることが確認されたが、これはまた、従来明らかとなっていた西田中瓦窯産の軒瓦と同笵であることも確認された。この他の出土瓦には丸瓦、平瓦、熨斗瓦、面戸瓦がある。注目すべき事実としては、これらの瓦には、桶（平瓦等）もしくは模骨（丸瓦等）への原材（粘土）巻き付けの技術に、粘土板巻き付け技法のものと粘土紐巻き付け技法の両者が見られる点が挙げられる。

従来、藤原宮での研究成果では、生産地の特定は軒瓦でしか行い得なかったため、一つの生産地（瓦窯）では一つの技法（粘土紐技法もしくは粘土板技法）しか見られないものと考えられてきたが、内山瓦窯の調査を通じて、初めてこの両方の技法が一つの瓦窯で混在することが確認された。この事実は、今後該期の瓦窯における工人組織等の解明にきわめて重要な視点を提供するものと思われる。

2　内山瓦窯の環境（図5）

（1）地理的環境

奈良盆地の中央やや北寄りに位置する大和郡山市は、市域の大半は緩傾斜の扇状地や氾濫原等の低地であり、市街化区域を除くならば、そこでは現在でも水田や畠地等の農地が比較的広範に広がっている。これに対し、丘陵（段丘）地形・山地としては、市域西部の矢田丘陵や、同北部の西ノ京丘陵、南部の額田部丘陵がある。これらは近年に至って住宅開発が著しく、果樹園や畠などは急速に減少しつつある。

下部大阪層群と呼ばれる岩層を構成主体とする矢田丘陵は、明瞭な断層崖をもって急峻に立ち上がるが、その西南～南側にかけては広範な段丘状の地形が見られる。斑鳩の法隆寺はこの矢田丘陵南側の段丘地形を大幅に整形して寺域としたものだが、今回報告する内山瓦窯も、こうした段丘（高位段丘）上に立地する。段丘の表層は上部大阪層群と呼ばれるもので、基本的に粘土・シルト・砂の互層から成り、含有する鉄分により通常は鮮やかな橙色ないしは橙白色を呈する。なお、現在のところ特に科学的な分析は行っていないが、内山瓦窯産の瓦の胎土は、この上部大阪層群の粘土（赤埴）をベースに、近在の河川の砂礫を若干混和したものではないかと想定される。

内山瓦窯の立地する段丘には地形図（図5）に見るように東南方向に伸びて東に開口する解析谷が細かに入り組んでおり、窯が築かれているのは、その中でも比較的規模の大きい解析谷

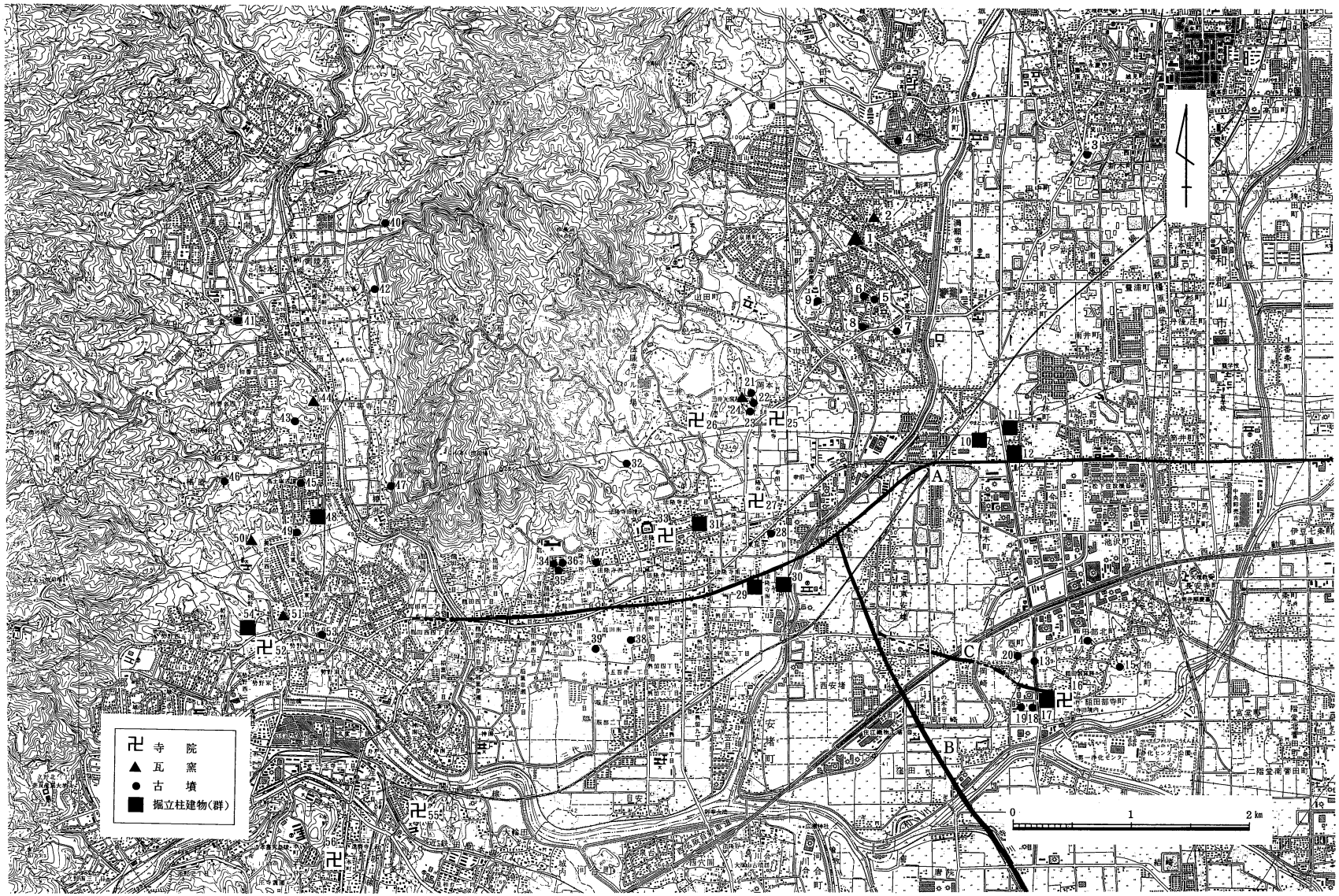


図５　内山瓦窯の位置及周辺の遺跡（S：1/50,000）

番号	遺　跡　名	番号	遺　跡　名
1	内山瓦窯	31	東院下層遺跡（斑鳩宮）
2	西田中瓦窯	32	仏塚古墳
3	郡山新木山古墳	33	法隆寺
4	割塚古墳	34	竜田御坊山１号墳
5	小泉東狐塚古墳	35	竜田御坊山２号墳
6	小泉狐塚古墳	36	竜田御坊山３号墳
7	六道山古墳	37	藤ノ木古墳
8	小泉大道古墳	38	斑鳩大塚古墳
9	笹尾古墳	39	戸垣山古墳
10	高月遺跡	40	大谷古墳
11	来光遺跡	41	ツボリ山古墳
12	神ノ木遺跡	42	三里古墳
13	額田部狐塚古墳	43	西宮古墳
14	舟墓古墳	44	安養寺瓦窯
15	松山古墳	45	鳥土塚古墳
16	額田寺	46	柿塚古墳
17	額田寺周辺遺跡	47	椿井宮山古墳
18	古墳	48	椿井西宮古墳
19	古墳	49	大塚山古墳
20	古墳	50	今池瓦窯
21	瓦塚１号墳	51	上ノ御所瓦窯
22	瓦塚２号墳	52	平隆寺
23	瓦３号墳	53	勢野茶臼山古墳
24	三井瓦窯	54	峯ノ阪遺跡
25	法起寺	55	西安寺跡
26	法輪寺	56	片岡王寺跡
27	中宮寺跡	A	龍田道（北の横大路）
28	駒塚古墳	B	太子道（筋違道）
29	酒ノ免遺跡	C	額田寺北方偏向地割
30	上宮遺跡（飽波葦垣宮）		

表１　内山瓦窯の周辺遺跡一覧表

図６　神ノ木遺跡SX-01
（北より）

図７　来光遺跡SB-01
（北より）

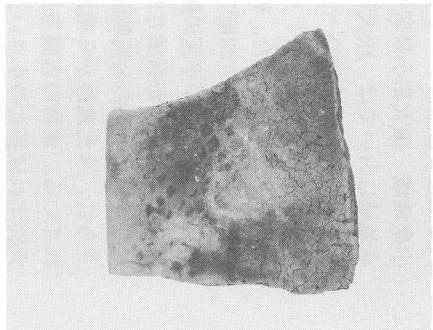


図8　来光遺跡出土平瓦

に面した丘陵の南斜面（傾斜約20°）下半部である。標高は３・４号窯の窯尻付近で約69.8mである。

（２）歴史的環境

ここでは、内山瓦窯の周辺の７世紀代を中心とする遺跡について、瓦窯とは直接関係しないものも含めて、遺跡を主要な纏まりごとに「小泉地域」、「斑鳩地域」、「平群地域」、「王寺地域」、「額田部地域」の５つの小地域に分けて記述を行いたい。また、この地域を通じていたと思われる主要な古道についても触れておきたい。

小泉地域　JR大和小泉駅の西側の丘陵（内山瓦窯が立地する丘陵）と、同駅東側一帯の地域。本地域においては、JR大和小泉駅前東側において、７世紀前葉の掘立柱建物を主体とする遺跡が見られる。来光遺跡（11）においては、比較的規模の大きい（東西約５m、南北約10.2m）ほぼ正方位（Ｎ１°Ｗ）の３×５間の南北棟建物や（図７）、その南に接する２×２間の総柱建物などが検出された[4]。建物の時期については、それに伴うと考えられる溝や土坑、柱掘り方からの出土遺物より判断して、７世紀第１四半期に溯る可能性が高い。さらに本遺跡からは格子目タタキを持つ平瓦の破片（図８）が出土し、調査地の周辺に７世紀前葉に溯る初期寺院が存在する可能性が指摘された[5]。また、それから約250m南の神ノ木遺跡（12）においては、やはり７世紀前葉の金属製品鋳造遺構の基部と考えられる特殊な遺構（図６）が検出されている[6]。さらに、来光遺跡から南西に約250mにある高月遺跡（10）では、掘立柱建物が計10棟検出されている[7]。建物の方眼方位に対する振れはＮ０°30′ＷからＮ21°30′Ｗまでのものがあり、大別すれば振れの小さいグループ（４棟）と、大きいグループ（５棟。このほか西偏角約５°で、両者の中間的なものが１棟存在する）に分けられるようであるが、この両者の時期差については、遺構の切り合い等がなかったので決め手を欠く。ただし、周辺遺構の出土遺物から考えて、全ての建物が７世紀前葉に溯る時期のものであることは確実である。

ところで、これらの７世紀前葉の遺跡群（以下、「大和小泉駅前遺跡群」と仮称したい）の検出地点は、従来いわれるところの大和国府推定地（今国府）の隣接地（北側）である[8]。これまでの調査では国府関連の遺構と思われるものは検出されていないので、ここでその問題について立ち入ることはできないが、国府推定地という点は一応留意しておきたい。また、この地を通って龍田道（北の横大路）が通っているが、大和小泉駅前遺跡群は、この古道の計画・施工と非常に密接な関係を持つものと推定されている[9]。

なお、大和小泉駅前遺跡群の周辺には首長墓クラスの古墳は存在せず（小規模な古墳は存在したようで、来光遺跡の調査では埴輪片や滑石製の紡錘車等が出土している）、それはJR線を隔てた西側丘陵上に分布している（５～９）。内山瓦窯や西田中瓦窯が立地するのは、この丘陵である。

斑鳩地域　斑鳩のシンボルともいえる法隆寺を中心に、現在の国道25号線沿い、およびその西北丘陵上に展開する地域。その中心の法隆寺（斑鳩寺）（33）では、現在の東院下層において斑鳩宮の一部と考えられる掘立柱建物群が検出されている[10]。また、法起寺（25）においても、それに先行する掘立柱建物などから成る遺構群が検出されている[11]。法輪寺（26）においては単弁八葉蓮華文軒丸瓦の出土から、７世紀前葉にはすでに何らかの瓦葺建物の存在が推定され[12]、同様の状況は中宮寺（27）においても指摘し得る[13]。

法隆寺の南東、富雄川の西岸においては大規模な掘立柱建物群が検出された上宮遺跡（30）があり、ここで検出された建物の主要な時期は８世紀だが、発掘調査では７世紀に溯る時期の遺物も多数出土している[14]。また、それに隣接して古墳～飛鳥時代の掘立柱建物群から成る酒ノ免遺跡（29）も存在する[15]。

この地域における生産遺跡としては、法輪寺の所用瓦（法隆寺式軒丸瓦および均整忍冬唐草

文軒平瓦等）を焼成したとみられる三井瓦窯（24）が知られている[16]。三井瓦窯は地山を刳り貫いた地下式有段登窯（窖窯）で、階段（９段）は地山を削り出したものである。この構造は、今回確認された、同じく地山削り出しの階段を持つ内山４号窯に類似する（１・３号窯は瓦積階段）。なお、橿原市木之本廃寺から、三井瓦窯産のものと思われる軒平瓦や、「池上」の刻印を持つ丸瓦（法輪寺で同じ刻印が出土＝「池上」刻印は三井瓦窯産の瓦に付されたものと思われる）が出土しているが[17]、これについては斑鳩と飛鳥を結ぶ太子道（図５－B）の存在がその背景となっている可能性が高い。

この地域における首長墓クラスの古墳としては、藤ノ木古墳（37）や竜田御坊山１～３号墳（34～36）などの法隆寺の西方に存在するもののほか、法起寺の西に隣接する瓦塚１～３号墳（21～23）が知られている[18]。

平群地域　現在の近鉄勢野北口駅から、その北側の近鉄生駒線沿い（平群谷）の地域。本地域においては、創建時期が７世紀前葉に溯る寺院として平隆寺（52）がある[19]。また、７世紀代の比較的規模の大きい掘立柱建物が検出された遺跡としては、平隆寺の北に隣接する峰ノ阪遺跡（54）や[20]、竜田川沿いに平群谷を溯った位置に存在する椿井・西宮遺跡（48）が挙げられる[21]。

この地域には瓦窯も多く知られており、平隆寺および中宮寺の創建瓦を焼成した今池瓦窯（50）は、弁間点珠のいわゆる高句麗式軒丸瓦と、剣尖形点珠のいわゆる百済式軒丸瓦が併焼されていた[22]。また、平隆寺の寺域北方には、法隆寺式軒丸瓦の変形としての、いわゆる「平隆寺式軒丸瓦」を焼成したとみられる上ノ御所瓦窯（51）があり[23]、同窯産の軒丸瓦は法起寺でも出土している[24]。なお、上ノ御所瓦窯産の平隆寺式軒丸瓦の同笵例としては伊予の朝生田廃寺出土例があり、遠距離にわたっての瓦笵の移動が認められている[25]。さらに、本地域では内山瓦窯と同様、藤原宮所用瓦（軒丸瓦6281Aa・Ab・Ac 型式、軒平瓦6641C 型式）を焼成した安養寺瓦窯（44）が存在する[26]。

また、この平群地域については、首長墓と考えられる古墳（40～49）の系譜が確実に追求可能な地域で、地域的なまとまりを考古学的に考察した研究が公表されている[27]。

王寺地域　平群地域とは大和川を隔てて対岸に位置する、JR王寺駅南側の丘陵一帯。本地域における７世紀の主要な寺院としては片岡王寺（56）、および西安寺（55）があり、なかでも前者については創建瓦が法隆寺と同笵関係にある[28]。首長墓クラスの古墳は周辺には見られないが、あるいは東方の河合町域の古墳（図幅外）が本地域と関係するものかもしれない。

額田部地域　現在の近鉄平端駅の西方、大和川北岸域の、額田部丘陵を中心とする地域。ここでは創建が７世紀に溯る寺院として額田寺（16）があり[29]、またその西側より７世紀代の大型の掘立柱建物（17）が検出されている[30]。なお、この地域においては、額田寺の北方に大和広域条里（正方位）とは明瞭に異なる方向性を持つ斜行地割が認められるが、この地割は額田寺の北方を通る古道（図５－C）の存在を示唆するものとして考えられている[31]。

また、この額田部地域においては、点在する古墳によって首長墓の系譜を追うことができ、先の平群地域と同様、地域的なまとまりを考古学的に追求することが可能である。

II　調査の概要

1　第４次調査の目的と経過

今回の内山瓦窯における調査（第４次調査）は、上記のような既往の調査所見を受け、従来溜池（マタカ池）の存在等によって調査ができなかった地域（２号窯の東側一帯）において、瓦窯ならびにその関連遺構の広がりを確認するために実施した。調査は平成７年７月24日に開始し、同年８月31日までの１カ月余りを費やした。調査に際しては、比較的広い範囲に個々の窯体が散発的に分布するという瓦窯遺跡の特性を勘案し、当初より試掘溝による調査は実施せず、調査対象地のうち掘削深度が浅く、矢板鋼板による土止めを必要としない範囲を面的に掘り下げるという方法をとった。その結果、調査面積は約570㎡となった。

実際の調査は表土を重機によって除去し、その後人力によって遺構面を精査するという方法で行ったが、その結果、直線溝 SD－03の延長部や、その斜面下約７ｍにおいて３号窯ならびに４号窯を新たに確認した。また、その他の遺構としては、炉跡状遺構 SK－01や、瓦の破片が廃棄されたような状態で出土した土坑 SK－03～06などが検出されている。

測量・実測は全て調査員ならびに補助員の手によって行った。また、埋め戻しは基本的に重機を使用し、調査当初に除去した表土を用いて行ったが、３号窯に関しては人力によって砂を充填した。それはいうまでもなく、今後の全面調査を想定してのことである。

以下、今回検出した各遺構および出土遺物について、その概要を記述する。

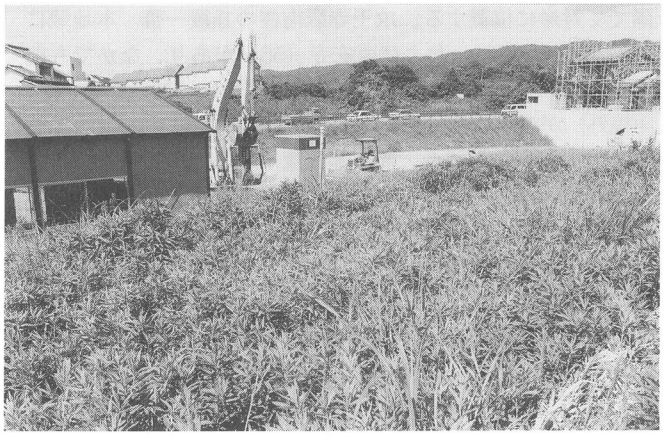


図９　調査前の状況（北東より）

図10　重機掘削

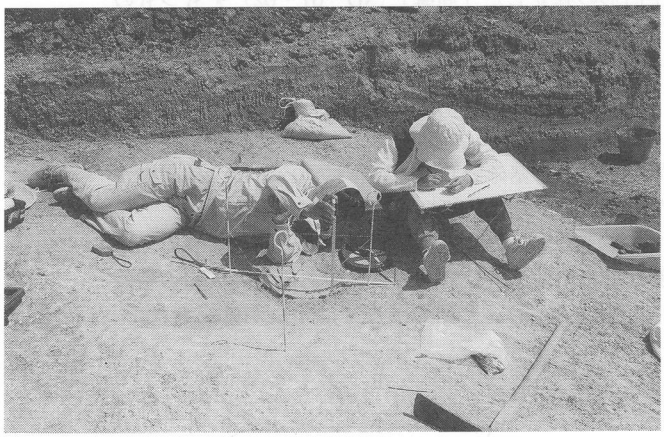


図11　実測

図12　完掘状況（南西より）

2　遺構（全体図＝図13）

（1）SD－03（図14、図版1・2）

前回までの調査でも検出されていた、直線溝 SD－03の延長部分を検出した。今回の検出長は約22.5mに及んだが、東端部分の検出には至らなかった（西端は SD－02に接続する＝図30）。今回は丘陵斜面を面的に開削したが、特に斜面の角度変換線を選んで掘削されたような様子は見られなかった。幅は1～1.5m、深さは検出面から約50cmを測る。堆積層は基本的に灰層（上層）、黄褐色粘質土層（下層）から成り、両者は共に人為的な埋積層と考えられる。このうち灰を多量に含む上層中には瓦の砕片（人為的に砕いたものと思われる＝図版1－1）を非常に多量に含み、下層中からは完形に近い瓦の破片が多く出土した（図版1－2・2－1）。前者については、溝の埋め戻しに際しての「地固め」的な意味を持つものかもしれない。

溝の性格については、後述のように斜面下約6m（溝心から煙道中心までは約6.5m）に位置する3号窯および4号窯を、山側斜面からの雨水から防ぐためのものと考えられる。この状況は、1号窯、2号窯のようにそれぞれに半円形の独立した「周溝」（SD－01・02）をもつものとは異なる。こうした直線溝を防水溝とした背景については、3・4号窯の間隔が狭く（約6.7m）、それぞれに付属するような半円形の周溝を掘ることができなかったためと思われる（1・2号窯の間隔は13m強）。

（2）3号窯（図15、図版3）

今回設定した調査区の南端付近で、窯体を新たに2基確認した。詳細については全体調査が行われてから述べたいが、ここでは今回の調査で知り得た点についての報告を行う。

3号窯は、煙道から焼成部上半にかけての約170cmを検出した。なお、検出部位については天井部は失われていたが、本来は地山を刳り貫いた地下式登窯（窖窯）である。焼成室の階段は1号窯と同様に瓦積みの構造的なもので（図15参照）、今回の調査では4段が確認された。

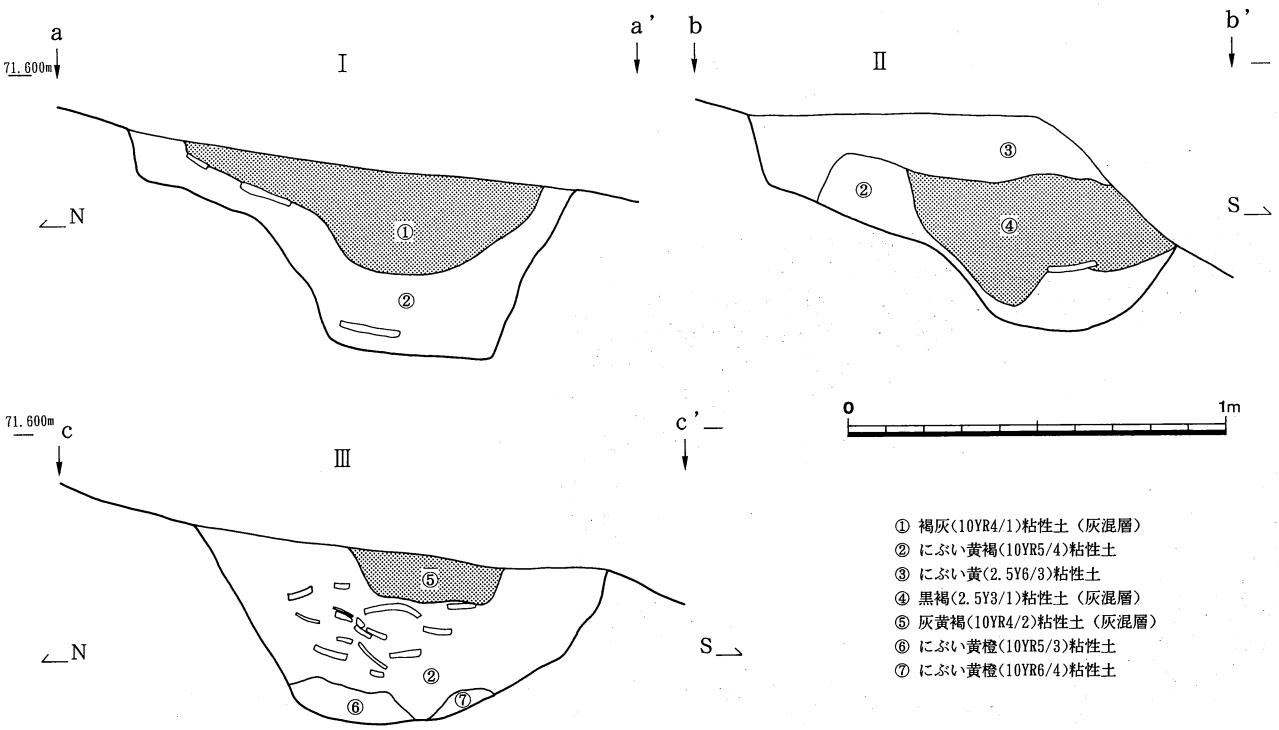


図14　SD－03土層断面図（S：1/20）

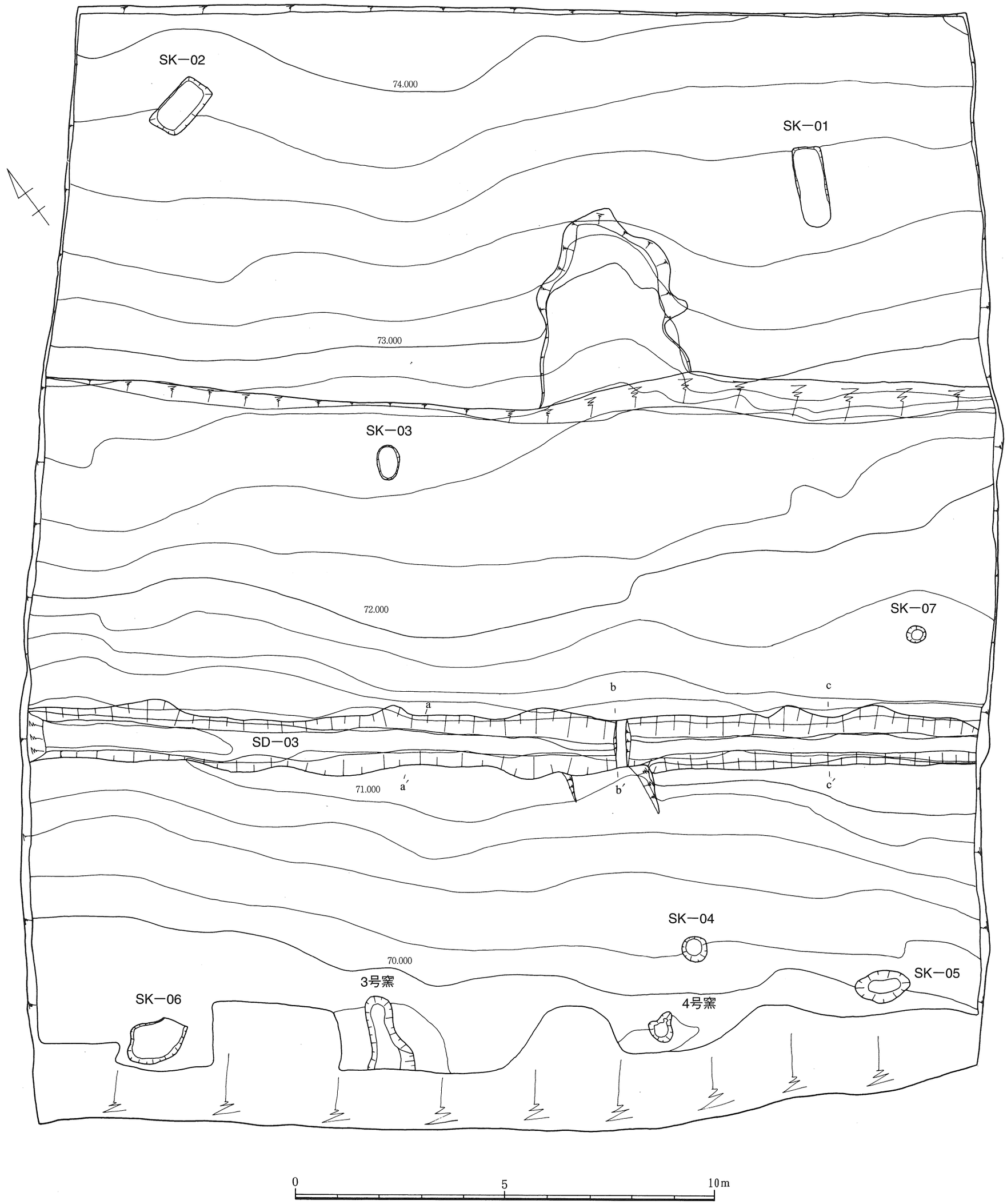


図13　検出遺構全体平面図（S：1/100）

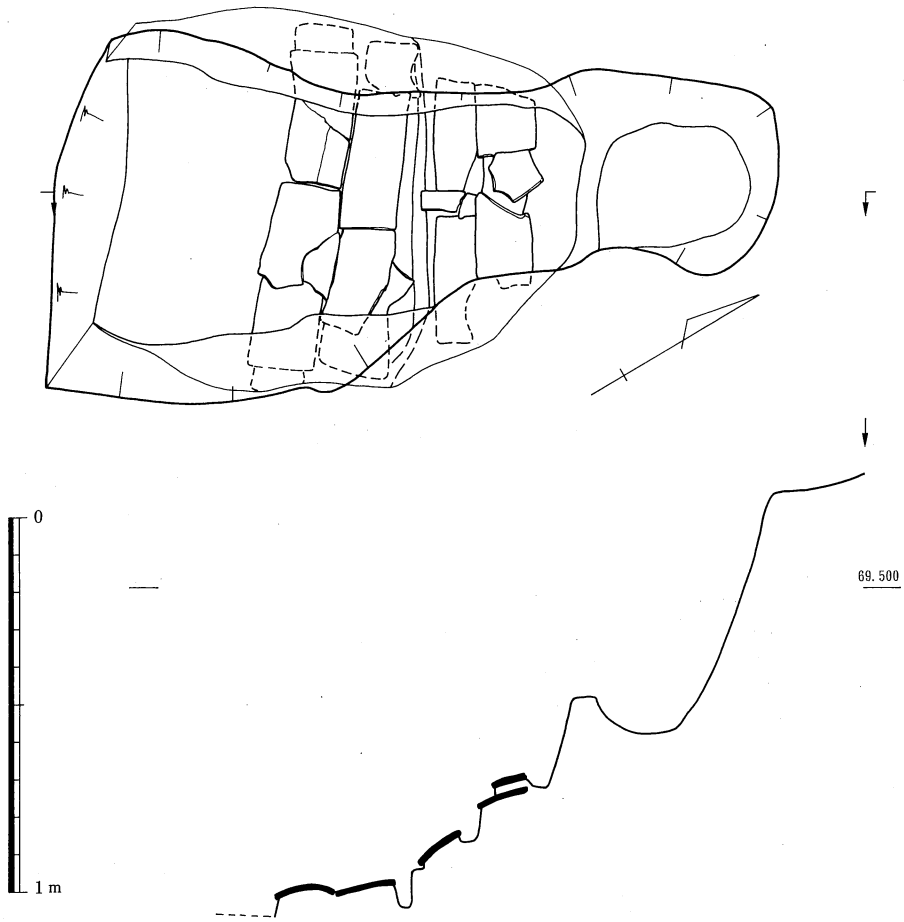


図15　3号窯平面図（上）及断面図（下）（S：1/20）

奥壁は1号窯とは異なり、明瞭な角を持たずに丸く収めている。幅は約60cmである。煙道部は焼成部から独立した位置に設けられており（1号窯は煙道が奥壁に接していた)、そこから約70°の角度で立ち上がるもので、検出面から約70cm遺存していた。煙道の平面形状はほぼ円形を呈するもので、その直径は約20cm程度と推定される。なお、先に調査が行われた1号窯の煙道は、奥壁からほぼ垂直に立ち上がるものであり、本例とはやや様相が異なる。また、焼成部の傾斜角については、今回の調査では判然としなかった。

（3）4号窯（図版4－1）

4号窯は、先述のように3号窯から約6.7m東で検出された窯体である。構造的にはやはり地下式登窯（窖窯）である。今回は煙道と、その周辺に開けられた穿孔がまず検出された。今回の部分調査では判然とはしないが、煙道の直径は他の窯と同じく20cm前後と思われ、また本来の煙道の東に直径約8cmの小規模な煙道が見られた。その性格については、還元時（燻焼）の際に開けておく小煙道の可能性がある。

なお、4号窯については天井部が良好に遺存するため、今回内部はほとんど調査できなかったが、階段は瓦積みではなく、地山の削り出しのようである。また焼成部奥壁幅は1mを優に越えるもので、1号窯（約50cm）や3号窯（約60cm）の倍近い値を示す。

（4）SK－01（図16、図版4－2）

調査区の北東隅付近で検出された、平面形態が長方形の焼土坑である。長辺約190cm、短辺約59cmを測る。また深さは検出面から約16cmと浅いものだが、本遺構が丘陵の上面近くで検出されたことを考慮すれば、畠作による削平が比較的大きいものと考えられる。

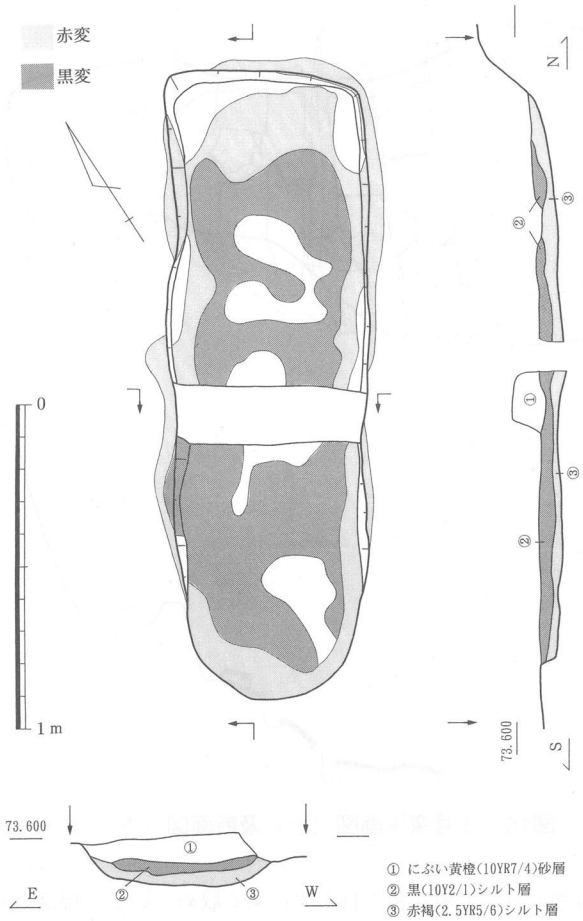


図16　SK－01平面図及土層断面図（S：1/20）

遺構の底面は受熱による固化ならびに赤化が著しい。それは底面下約７㎝まで及ぶもので、このことは本遺構が相当の高熱を長期間にわたって受け続けたことを示している。遺構内の堆積層（図16－①層）中からは多くの木炭が出土したほか、他の遺構と同じような７世紀末の瓦が見られた。また、先述の直線溝 SD－03中軸線から本遺構中心までの距離は約13.4ｍを測り、３・４号窯の間隔（6.7m）、１・２号窯の間隔（13m強）、また SD－03から３・４号窯までの距離（6.5m）に近似した値、もしくはその倍数の近似値になるが、このことは、本遺構が各窯体や溝などの瓦窯構成遺構と同じ時期のものである可能性がきわめて高いことを示している。遺構の遺存状況が必ずしも良好ではないので明言はできないが、本遺構については、造瓦に関わる何らかの金属製の道具類を作るための炉跡ではないかと考えられる。この場合、本遺構は本来は構造的な上部施設を伴う溶解炉の基底部分と想定される。

（５）SK－02（図17、図版５－１）

調査区の北西端付近で検出された平面形が長方形の土坑である。長辺約160㎝、短辺約80㎝、深さは検出面から約25㎝を測る。堆積層は粘性を帯びた褐色土一層に限られる。遺物が全く出土しなかったので時期は不明である。遺構の性格としては、その形態・規模から見て墓壙の可能性がある。ただし、骨や歯などは出土していない。

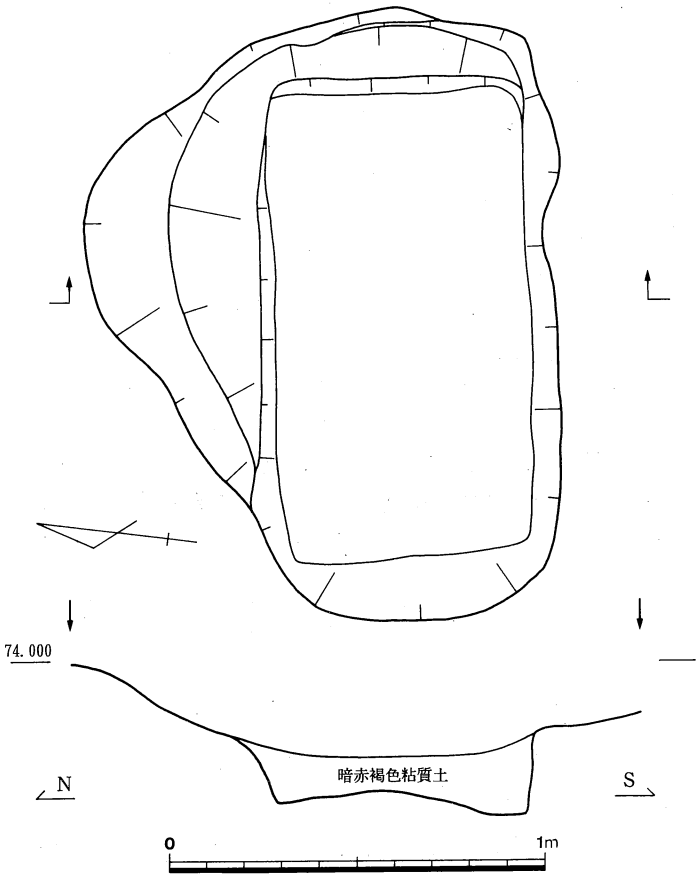


図17　SK－02平面図及土層断面図（S：1/20）

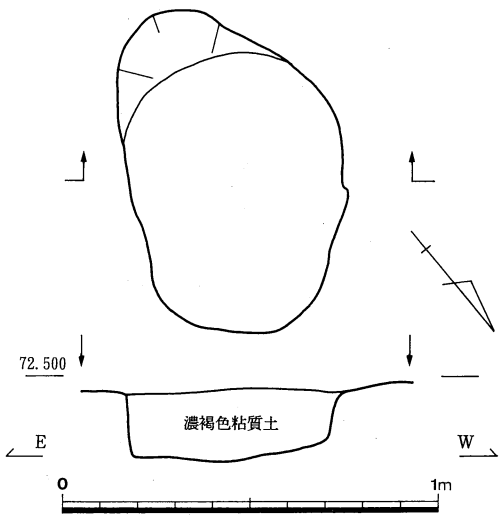


図18　SK－03平面図及土層断面図（S：1/20）

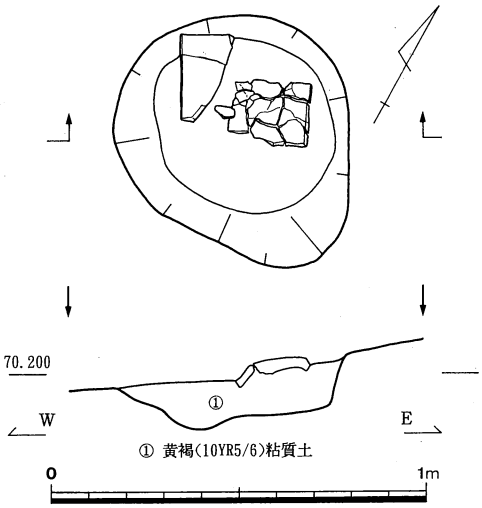


図19　SK－04平面図（遺物出土状況）及土層断面図（S：1/20）

（6）SK－03（図18）

調査区の中央付近で検出された、平面形が楕円形の土坑である。長径約80cm、短径約60cm、深さは検出面から約20cmを測る。堆積層は濃褐色の粘性土一層で、遺物は出土しなかった。遺構の性格は不明である。

（7）SK－04（図19、図版５－２）

調査区の南東隅付近、４号窯の北で検出された、直径約60cmの円形土坑である。深さは検出面から約12cmを測る。堆積層は黄褐色の粘性土一層である。土坑上面からは平瓦が出土したが、それは他の瓦窯関係の遺構出土のものと同じ時期である。したがって、遺構の時期は７世紀末頃と思われる。なお、遺構の性格については不明である。

（8）SK－05（図20）

調査区の東南隅付近で検出された、長卵形の土坑である。長径約120cm、短径約75cm、深さは検出面から約15cmを測る。堆積層は黄褐色の粘性土一層に限られる。同層中より白鳳期の瓦が数点出土した。したがって遺構の時期については７世紀末と考えられる。なお、遺構の性格については不明である。

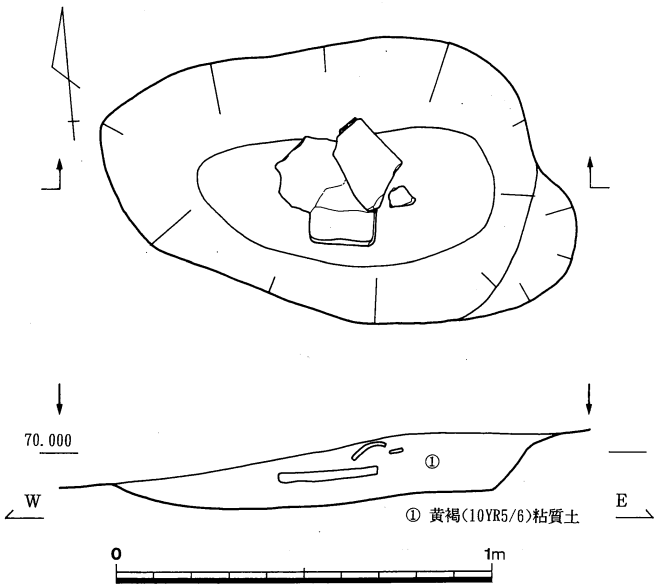


図20　SK－05平面図（遺物出土状況）及土層断面図（S：1/20）

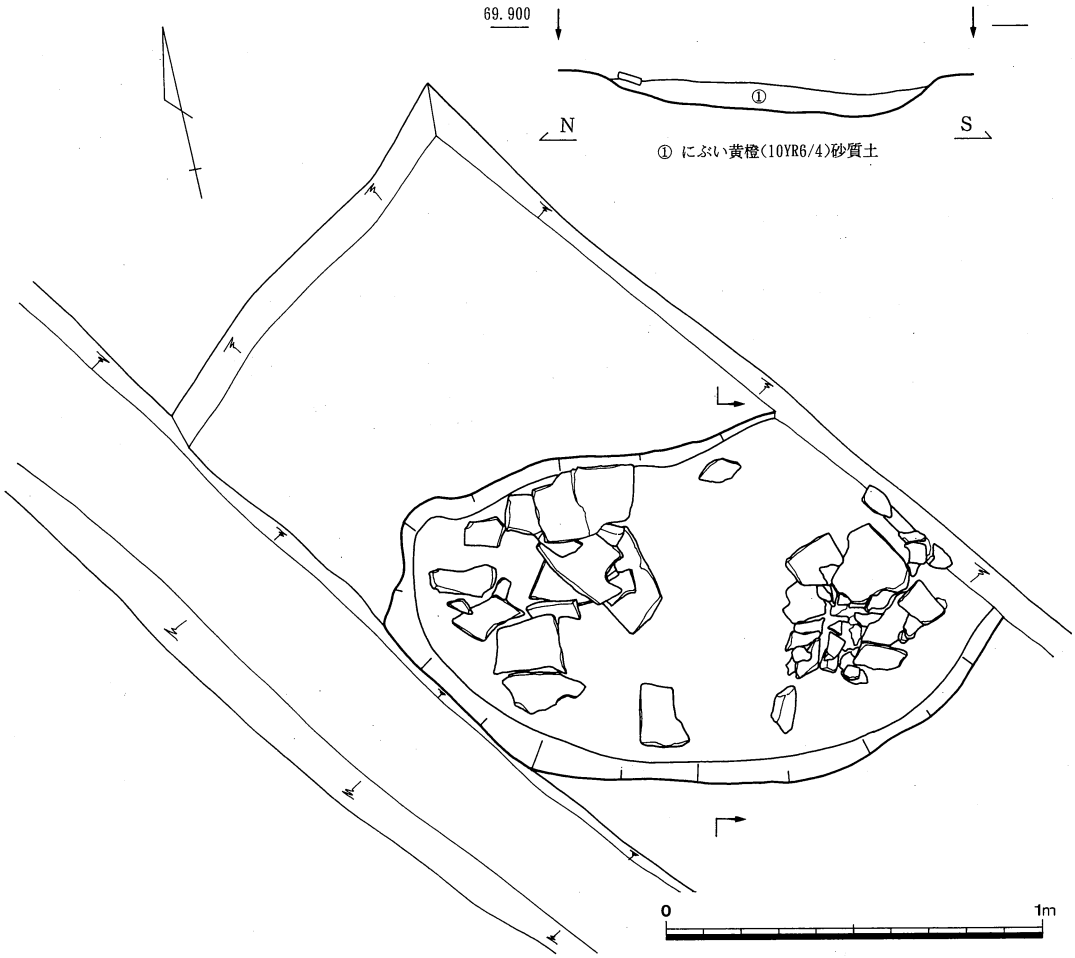


図21　SK－06平面図（遺物出土状況）及土層断面図（S：1/20）

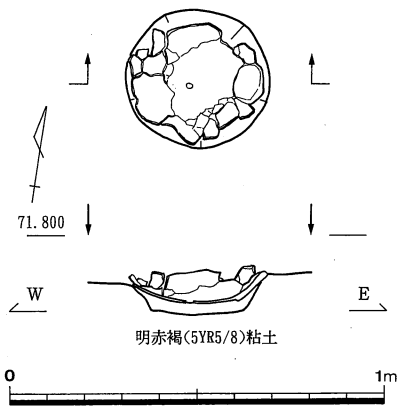


図22　SK－07平面図（遺物出土状況）及土層断面図（S：1/20）

（9）SK－06（図21、図版6－1）

調査区の南西隅で検出された、不定形の土坑である。深さは検出面から約10cmを測る。堆積層は黄橙色の粘性土一層に限られる。内部より比較的多量の瓦（白鳳期）が出土した。なお、本遺構については調査区の制約上、全体は十分に把握していない。後日3・4号窯の調査時に改めて確認したい。

(10) SK－07（図22、図版6－2）

調査区東中央付近で検出された遺構である。円形の土坑底に土器（土師器壷）を斜めの状態で据えていたようであるが、遺構の大半が削平されているために本来の状況は明らかではない。土器を土坑に据えた状態で最も下となる部分には、直径約1.5cmの穿孔が見られる。また出土土器の復元から、本遺構にはこの個体の他に別の個体（器種不明）が存在したようである。これらの点から判断して、本遺構は古墳時代前期の土器棺墓の可能性が高いものと思われる。

3　遺物

今回の範囲確認調査では瓦類を中心に比較的多くの遺物が出土したが、瓦の多くは直線溝SD－03から出土したものである。ここではそのSD－03の出土瓦を中心に報告を行う。

（1）SD－03出土屋瓦

軒丸瓦（図23、図版7・8）　ここで紹介する軒丸瓦は、以前の調査（第3次調査）において1号窯の前庭部から出土したもの（1）、およびSD－03における以前の調査（第2次調査）において、同遺構の西側部分から出土したもの（2）である。したがって図面等はすでに前回公

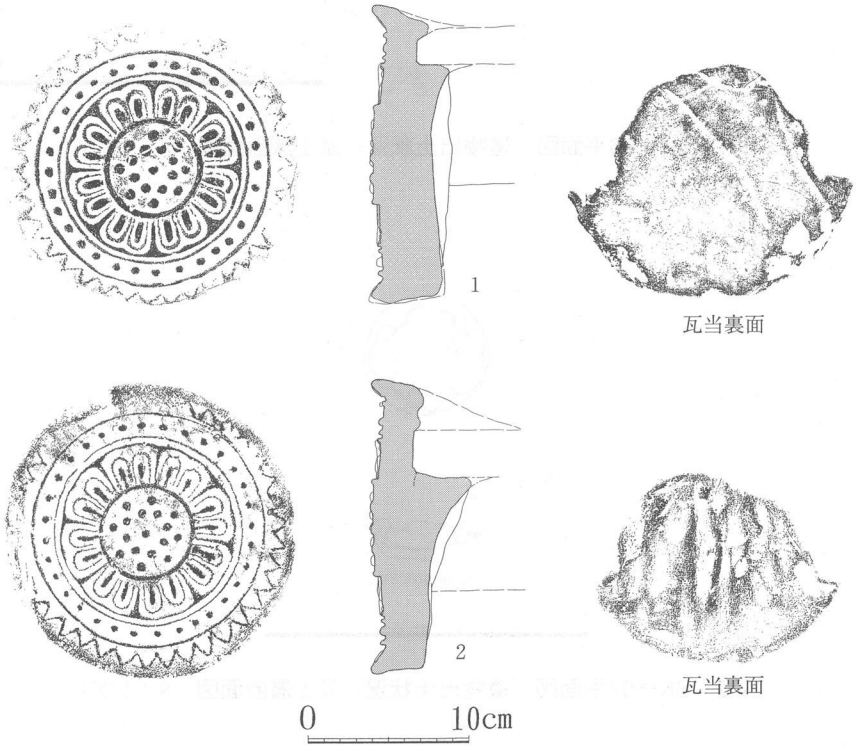


図23　内山瓦窯出土軒丸瓦拓影及実測図

（上＝1号窯前面、下＝SD－03出土）（S：1/4）※花谷浩氏原図

表したが、今回花谷浩氏（奈良国立文化財研究所）により再実測していただく機会を得たので、同図と共にここに再収録するものである。

軒丸瓦はいずれも6281Ba 型式で、笵傷から判断して第Ⅰ章で触れた西田中瓦窯と同笵品であることが明らかとなっている。藤原宮所用瓦で、内区に複弁八葉蓮華文を置き、外区内縁に32個の珠文を配し、外区外縁には37単位の線鋸歯文を巡らせる。なお、蓮華文の間弁は子葉を取り囲む変則的なものである（複弁Ｂ系統）。笵傷は３箇所において認められる（図版７）。また、笵端の痕跡を比較的明瞭に残し、瓦当裏面に布目圧痕のある個体（図版８－101）がある。

軒丸瓦の瓦当接合の技法には、前回指摘したように２種類のものが認められる。ひとつは１のように瓦当の上面近くに接合溝を設け、接合の際には粘土はあまり多く貼り付けず、また、瓦当裏面にはていねいなナデ調整が施されるものである（Ｂ技法）。もうひとつは、２のように瓦当上端からやや下がった位置に接合溝を設け、丸瓦接合部の上下（凸面・凹面）に分厚く粘土を貼り付け、瓦当裏面には指頭によるタテ方向のナデの痕跡を明瞭に残すものである（Ａ技法）。ここでは詳しく触れられないが、これまでの発掘調査データに基づくならば、瓦当面の接合技法は、それぞれの技法を持つ軒丸瓦の出土遺構から判断して、Ｂ技法→Ａ技法へと変

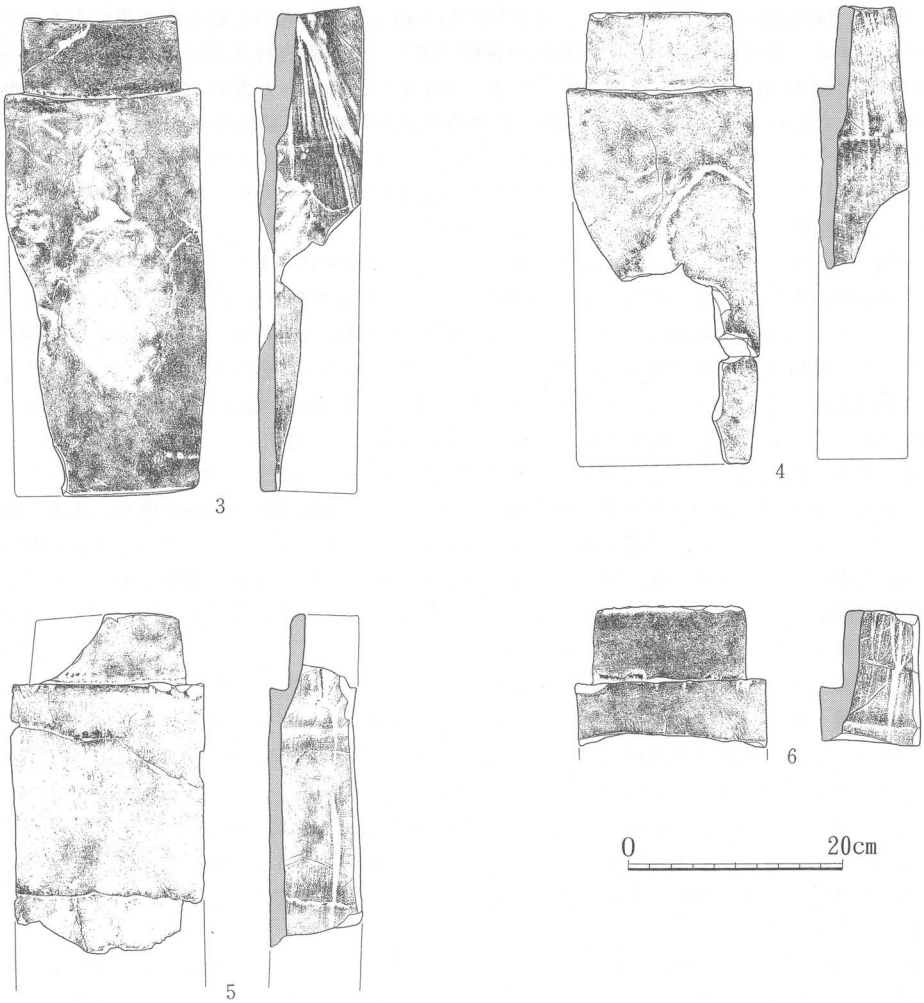


図24　SD－03出土丸瓦実測図及拓影（S：1/6）

化したものとして捉えられる[32]。

なお、SD－03からは今回の調査、および前回の調査では軒平瓦の良好な個体は出土していない。図版８－102・103に示した6641Ｆ型式軒平瓦の破片は、いずれも段顎の剥離部分である。これらは一見すると粘土紐を継いだもののようにも見受けられるが、子細に観察すると粘土板を粘土塊から切り出す際の糸切り痕を有するものがあり、したがってこれをもって直ちに6641Ｆ型式軒平瓦における粘土紐技法の存在を裏付けるものとすることはできない[33]。

丸瓦（図24、図版９）　いずれも玉縁を持つ丸瓦である。前回の報告中でも指摘したが、内山瓦窯で製作された瓦には、丸瓦に限らず、成形材に粘土紐を用いたものと粘土板を用いたものの両者が混在する。ここに示した丸瓦のうち、３および５は粘土紐による成形痕を明瞭に残す個体で、４・６については成形材は不明である。いずれの個体も内面には布目を明瞭に残すが、外面の縄目タタキ痕はナデ調整によって丁寧にナデ消されている。全長は423～447㎜で、前回報告のものとほとんど変わらない。内山瓦窯の場合、丸瓦は430㎜足らずのものが平均的である。幅は170～180㎜である。玉縁の長さは125～146㎜を測る。焼成はいずれも軟質ではあるが、表面の燻しが十分になされた瓦質となっている。

平瓦（図25、図版10・11）　平瓦にも、成形材に粘土紐を用いたものと粘土板を用いたものの両者が混在する。前回は１号窯前面部分出土資料に関し、主に調整技法等に基づいての分類を行ったが、今回の SD－03出土資料に関しては、現在までに得られた資料が比較的少数で分類に至らなかったため、ここでは任意に抽出した遺存状況の良好な５個体のみを図示する。

図示資料のうち、成形材に粘土紐を用いたものは７および９で、粘土板を用いたものは10である。その他に関しては、不明である。今回報告の個体はいずれも凸面には縄目タタキ痕を明瞭に残し、前回報告のａ群１類平瓦のようなナデが凸面にまで及ぶようなものはない。ただし、SD－03出土資料中にも、小片ではあるがきわめて丁寧な調整を持つものが数個体見られることから、今後の調査における完形品の出土が期待される。凹面の調整も比較的粗いものが多く、若干のナデと、凹面側広端縁にヘラケズリによる面取りが見られる程度で、布目ならびに桶枠圧痕を残す。桶枠木痕の幅は30㎜足らずであり、乾燥・焼成時の収縮を考慮すれば、本来の桶枠木の幅は30㎜をやや越えるものと思われる。長さは382～395㎜、幅は広端側で295㎜（11）、狭端側で254～265㎜を測る。成形は桶巻の４枚分割によるものと思われる。

面戸瓦（図26、図版11）　ここで報告するものは、以前の第２次調査で SD－03から出土した個体である。成形材にはいずれも粘土紐が用いられている。幅は13で196㎜を測り、丸瓦の幅より大きい。なお、このことは前回報告の面戸瓦においてもあてはまることから、丸瓦の模骨と面戸瓦の模骨とは、それぞれに異なった専用のものが用いられたものと推定される。長さは13で395㎜を測る。凸面にはナデが施されるが、縄目タタキ痕を僅かに残す。内面は布目を明瞭に残し、側端には丁寧なヘラ切りが見られる。

熨斗瓦（図26、図版12）　熨斗瓦はいずれも平瓦を分割したもので、本来の平瓦の側端面（縁）をそのまま残す個体（14・18図示左側）が存在する。調整については、凹面・凸面共に平瓦と同様である。平瓦の裁断は焼成前に行われており、裁面には粗いヘラ切りの痕跡を残す。成形材には粘土紐を用いたもの（14～16）と粘土板を用いたもの（17・18）の両者がある。なお、今回報告の14・18のほかに前回報告の２個体（合計４個体）が幅約100㎜を測り、幅をこの数値に定めた規格が存在するようである。しかし、いままでのところその他の個体についてはあまり統一性が見られず、規格の存在を指摘することはできない。また、長さの判明する完形品は今までの調査では出土していない。

窯記号（図27、図版13）　SD－03出土資料中における窯記号について紹介する。今回確認された窯記号は、前回紹介のものと基本的に同じ「＋」（ｃ・ｄ）もしくはそれに一線を加えたもの（ａ）、さらに「－」（ｂ）があるが、ｂについては本来は「＋」であった可能性も高い。記

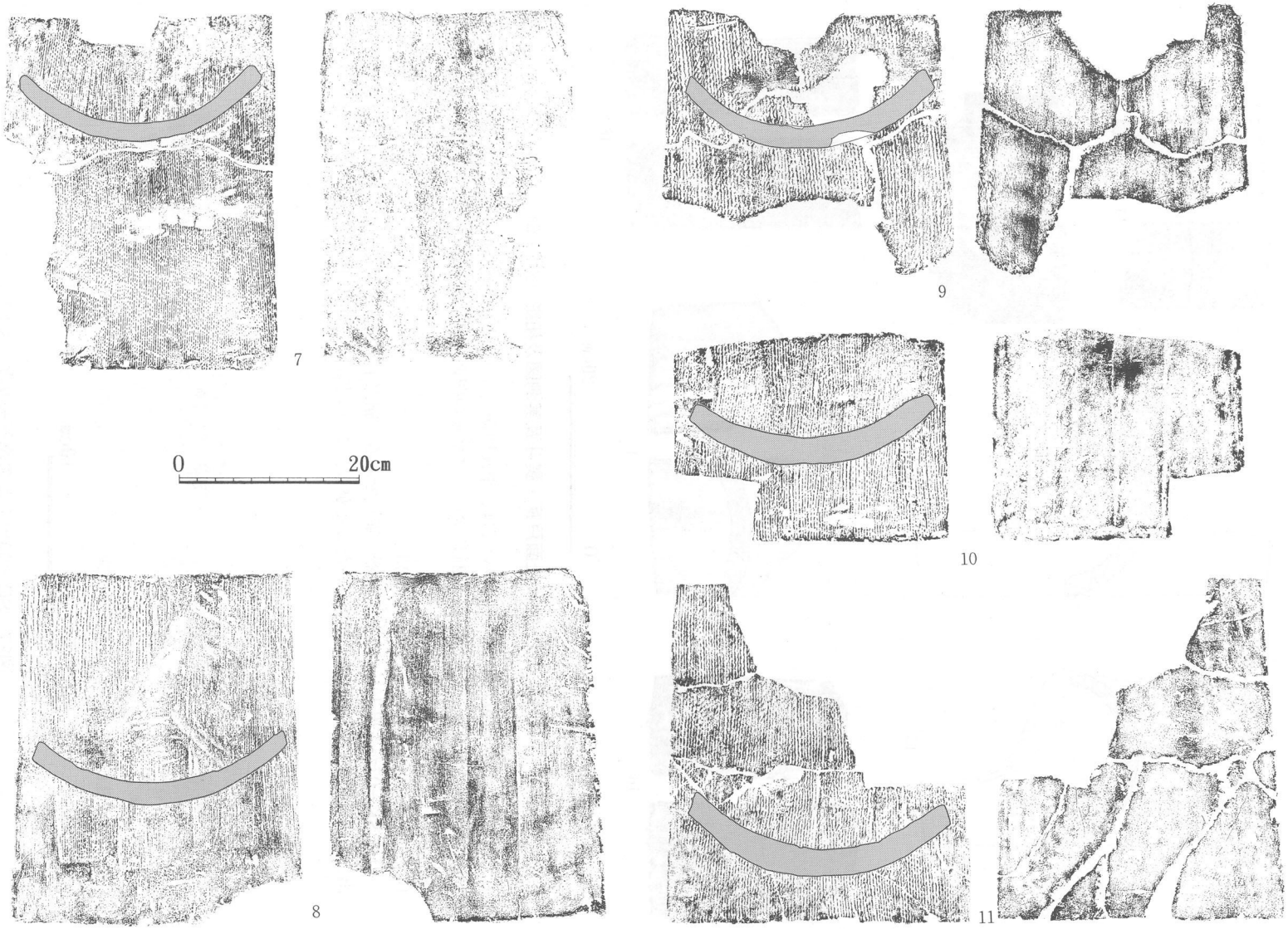


図25　SD－03出土平瓦実測図及拓影（S：1/6）

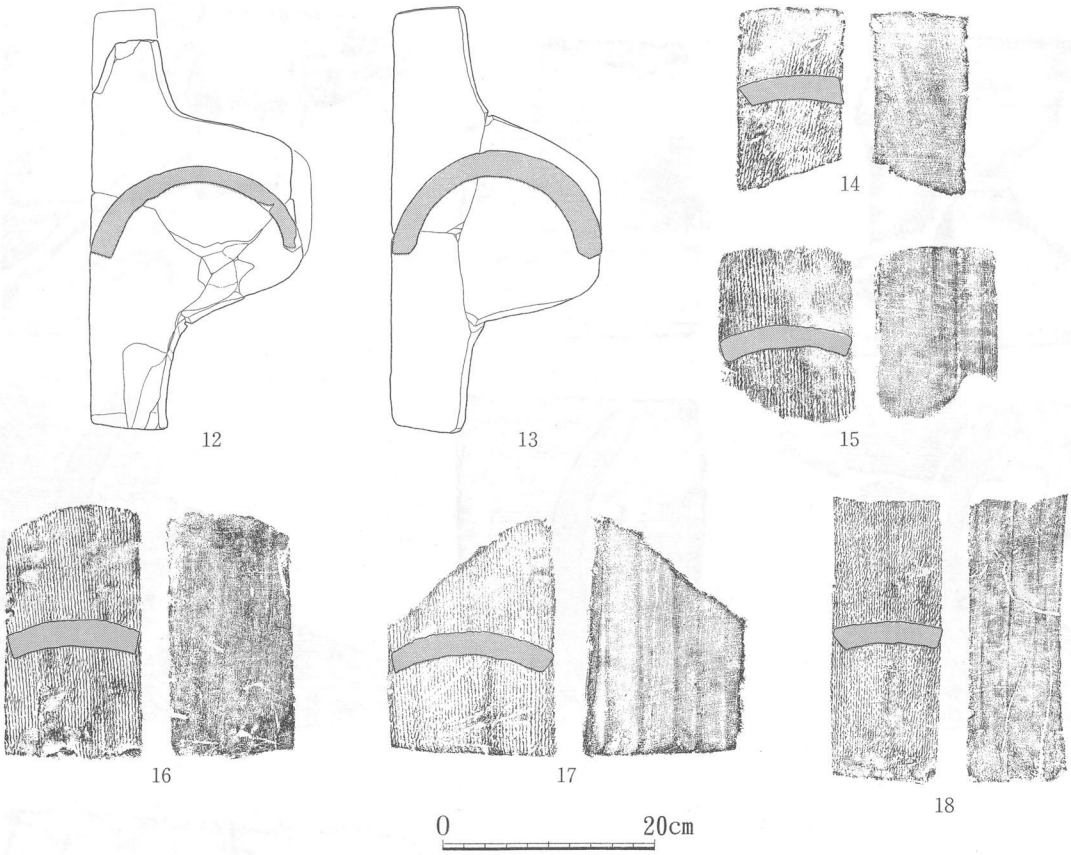


図26　SD－03出土面戸瓦・熨斗瓦実測図及拡影（S：1/6）

号が付される瓦の種類および位置については、平瓦凹面（a・b）、平瓦凸面（c）、丸瓦凹面（d）がある。ちなみに、前回出土資料については平瓦の凹面に窯記号の付された例は見られなかった。

（2）SK－07出土土師器（図28、図版13）

21はSK－07から出土した古式土師器（壷）である。胴部下半に直径約15㎜の穿孔が見られ、出土時はこの部分が一番下になっていたことから、この土器は土器棺に使用されたものと思わ

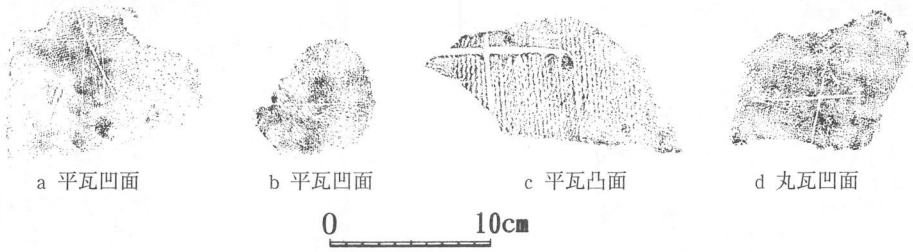


図27　SD－03出土瓦の窯記号拓影（S：1/4）

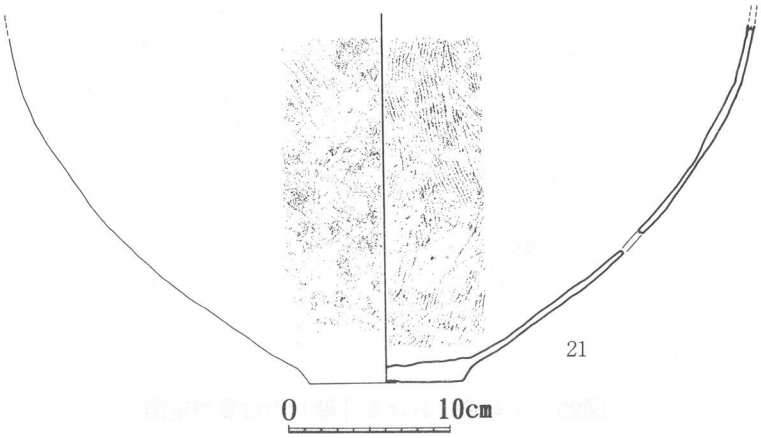


図28　SK－07出土土師器実測図（S：1/4）

れる。また、図示不可能な小片ながら、別の土師器個体（器種不明）の破片が同時に出土しており、これは棺の蓋として用いられた個体のものの可能性がある。内面にはハケメ調整が見られ（ハケメ４本／cm、原体幅約20mm）、外面にはミガキ調整（原体幅約2.5mm）が施される。底部は平底で直径約90mmを測る。器形は比較的胴の張ったものである。色調は明褐色を呈し、胎土は長石、チャート粗粒のほか雲母の微粒を含むもので、在地産と考えられる。なお、詳細な時期については不明である。

Ⅲ　まとめ（窯体の分布状況に関する所見）

今回の調査で新たに窯体２基を確認したが（３・４号窯）、その間隔（煙道中心間隔）は約6.7mであった。そして、両窯共に直線溝 SD－03からの距離（溝中軸線～窯煙道の中心。焼成部奥壁でとればどちらも約6.7mとなる）が約6.5mである。また、半円形周溝を持つ１・２号窯の間隔は３・４号窯のほぼ倍の13m強を測る。このほか、これまでの調査で得られたデータのうちで13mに近い数値を探すならば、１号窯の周溝 SD－01の東西両端の間隔や（ただし２号窯のものはやや狭く、心々で12m弱）、SD－03心から焼土坑 SK－01中心までの距離を挙げることができる。つまり、以上の数値によれば、窯の計画には約6.7mという数字が重要な意味をもっていることが知られる。現時点では遺構毎に測距の基準が明確ではないので少々誤差があるだろうが、この場合の１尺は6700cm÷200＝33.5cm程度になり、当時一般的に用いられていた高麗尺（35.2～35.5cm）に満たない数字となる。また、高麗尺での200尺は少なく見積もっても７mを越えることから、本瓦窯の計画に高麗尺が使用された可能性はきわめて薄いものと考える。

また、先に調査された１号窯は、先述のように調査方針に従って床の瓦を一切取り外さなかった。したがって確実にそうと言い切ることはできないが、１号窯は本来は燃焼部と焼成部の間に段差（階）が設けられていた可能性がある。そしてその階が設けられていた箇所としては、瓦の積み方や焼成室床面の角度の変化から考えて図29に示した位置となる可能性が高い。その場合、窯の奥壁から階までの本来の焼成部の長さは335cm前後と想定される。

以上を要約すれば、内山瓦窯では計画寸法の基準に一尺33.5cmの近似値が使用されていた可

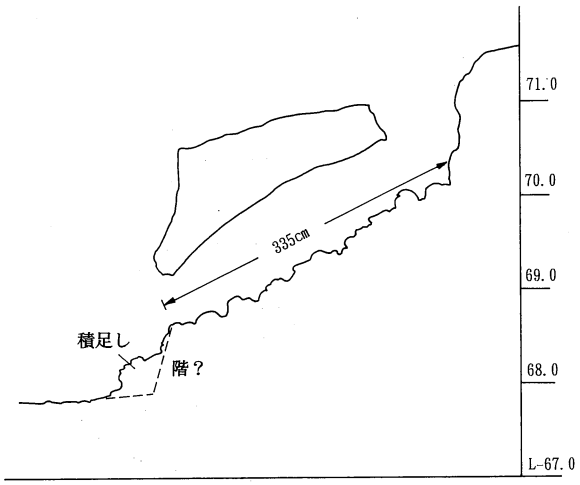


図29　1号窯における「階」の位置想定図

能性が高いということになる。次に、これを調査区周辺全体に敷衍するならば、窯の配置等の計画にこの基準値が使用されている可能性が高い以上、4号窯の東や3号窯の西に未知の窯体が存在する可能性を指摘し得る。これを具体的に3号窯の西で見れば、3号窯と2号窯の間隔がほぼ26.8mなので、機械的に計算すれば両窯の間には未知の窯体が3基（それぞれの間隔を6.7mとした場合）存在することになろう（a～c窯と称する＝図30）。しかしこの想定では、いちばん2号窯に近い窯体（a窯）は周溝 SD－02に近接しすぎるのではないかと思われる。この場合、SD－02の東西幅が12m弱しかない理由をこのa窯の存在に求めるのであれば、窯体

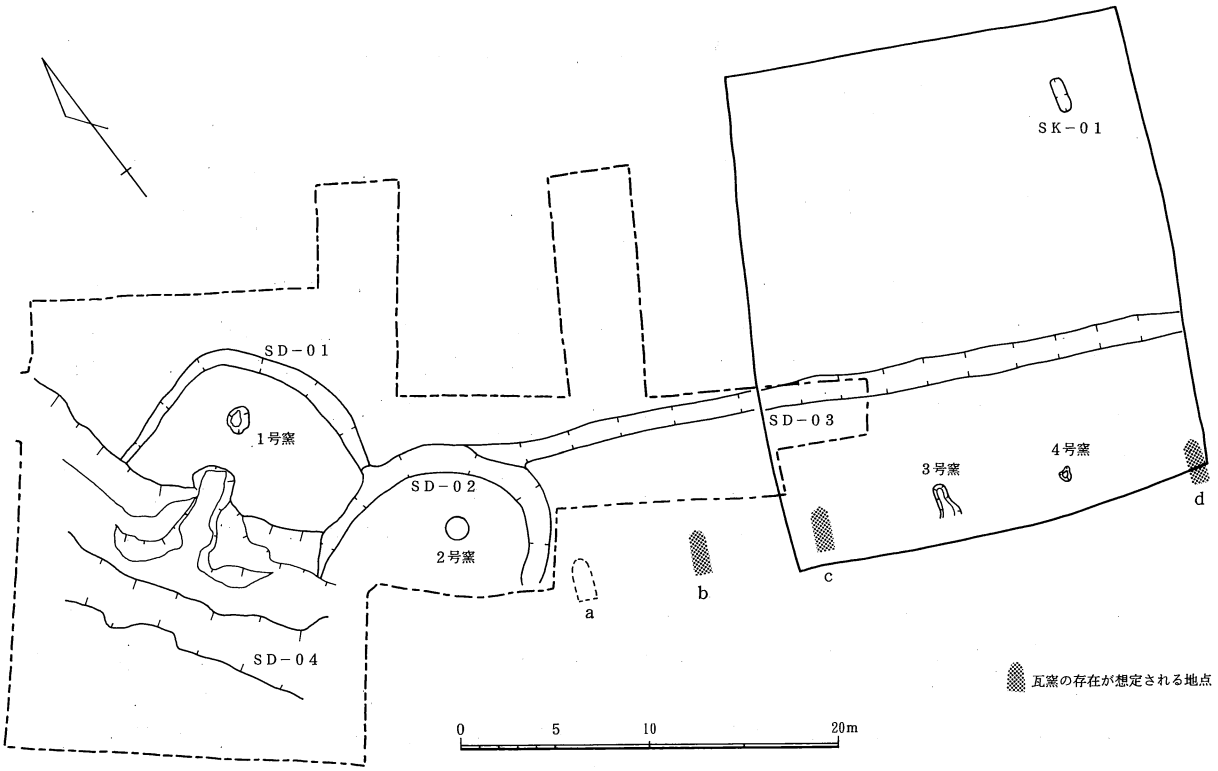


図30　主要遺構の位置概念図（S：1/400）

の配置は論理的に説明できるが、現在までの調査知見では、溝（SD－01～03）の配置は既述のように SD－02が中心となっている可能性も強く、この問題についてはａ窯の存在も含め、今後の調査に委ねる他はない。また、４号窯の東にも6.7m間隔で窯体が並ぶ可能性は高いものと考えられるが（ｄ窯～）、SD－03の東限が判明していない現状では、何基存在するかは想定不可能である。

いずれにせよ、これまでの調査地周辺に３ないし４基の窯体が存在する可能性は高く、その存在の確定ならびに具体的な個々の窯体の発掘調査が急がれねばなるまい。また SD－03の延長方向には未知の窯体が相当数存在するのではないかと思われる。すなわち、今後の周辺地の開発行為に際しては確実な事前調査が必要である。

当初２基の窯体が確認され、その遺存状況がきわめて良好な点において学界の注目を集めた内山瓦窯は、今回の調査を通じて、一躍窯体の密集する「造瓦工房」の様相を呈してきた。また、炉跡かと思われる SK－01の存在は、瓦窯の周辺施設の存在を示唆している。すなわち今回の範囲確認調査により、この内山瓦窯の学術的な貴重性は一層強まったものといえよう。その全体的保全と活用に向け、文化財保護行政の一早い対応が切望される。

【注】

1）京谷康信「奈良時代窯跡調査概報」（『考古学雑誌』21－11　1931）。
2）西田中瓦窯の出土瓦については、確実なものとしては地元（西田中町）在住の岡田久市氏が若干所有されているに過ぎない（京谷による戦前の発掘時に出土したもの）。
3）山川均ほか『内山瓦窯１号窯発掘調査概報』（大和郡山市教育委員会　1995）。本章における以下の記述は、全て本書による。また、同書では先に触れた岡田氏所有の西田中瓦窯産の軒丸瓦が紹介されている。
4）山川　均『来光遺跡第２次発掘調査概報』（大和郡山市教育委員会　1995）。
5）山川　均『来光遺跡第１次発掘調査概報』（大和郡山市教育委員会　1992）。
6）山川　均『神ノ木遺跡発掘調査概報』（大和郡山市教育委員会　1994）。
7）山川　均『高月遺跡発掘調査報告書』（大和郡山市教育委員会　1991）。
8）和田　萃「大和国府について」（『赤松秀俊教授退官記念国史論集』同記念事業会　1973）。
9）山川　均「大和における七世紀代の主要交通路に関する考古学的研究」（『ヒストリア』150　1996）、および同「条里制と村落」（『歴史評論』538　1995）。
10）『法隆寺東院における発掘調査報告書』（国立博物館　1948）。
11）『法起寺旧境内緊急発掘調査概要』（奈良県　1969）ほか。
12）鈴木嘉吉ほか『法輪寺三重塔調査報告書』（観光資源保護財団　1972）。
13）石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』（聖徳太子奉讃会　1936）ほか。
14）平田政彦「上宮遺跡」（『平成３年度奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会　1992）。
15）藤井利章『酒ノ免・東福寺遺跡発掘調査概報』（斑鳩町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所　1979）ほか。
16）岸　熊吉「三井瓦窯及び額田部窯阯調査報告」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第13冊』奈良県　1935）。
17）「左京六条三坊の調査（第45次・46次）」（『飛鳥・藤原宮発掘調査概報16』奈良国立文化財研究所　1986）。
18）斑鳩町域の古墳については、前園実知雄編『斑鳩町の古墳』（斑鳩町教育委員会 1990）において簡

潔に纏められている。

19) 亀田　博『平隆寺』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第47冊　奈良県立橿原考古学研究所 1984)。

20)『峯ノ阪遺跡現地説明会資料』(奈良県立橿原考古学研究所　1995)。

21) 河上邦彦・佐々木好直『椿井・西宮遺跡』(平群町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所 1987) ほか。

22) 田中重久「平隆寺創立の研究」(『考古学』11－9　1938)。

23) 前出注22田中文献。

24) 前出注13石田文献。

25) 亀田修一「地方への瓦の伝播－伊予の場合－」(『古代』97　早稲田大学考古学会　1994)。

26) 大脇　潔「屋瓦と製作地」(『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報第31冊 奈良国立文化財研究所　1978)。

27) 辰巳和弘「平群氏に関する基礎的考察（下)」(『古代学研究』65　1972)。

28) 毛利光俊彦・佐川正敏・花谷浩「瓦の変遷」(『法隆寺の至宝　瓦』小学館　1992)。

29) 山川　均『額田寺旧境内表採軒瓦調査報告』(大和郡山市教育委員会　1995) ほか。

30) 服部伊久男「額田寺と条里」(『条里制研究』10　条里制研究会　1994)。

31) 前出注30服部文献。

32) 前出注３山川文献。

33) 奈良国立文化財研究所、花谷浩氏のご教示を得た（注３文献参照)。

軒丸瓦瓦当計測値（mm）			
中房径	60	外区広	116
連子数	1＋8＋8	外区内縁幅	13
弁区径	116	〃 文様	S
弁幅	40	外区外縁幅	18
弁数	F8	〃 高	11
		〃 文様	LV

※F：複弁　S：珠文　LV：凸線鋸歯文

No.	瓦当計測値（mm）		調整		胎土							色調	焼成		備考
	直径	厚さ	瓦当裏面調整	瓦当側面調整	石英	長石	チャート	クサリ礫	角閃石	雲母					
1	183	50	円周ナデ？	？	M1	M2	0	ML4	0	Ⓢ2	やや粗	黄灰（2.5Y7/2）	やや軟	瓦質	笵端痕跡残る（瓦当縁端より10mm）1号窯前庭部出土（3次調査）
2	179	30	ユビナデ	粗いケズリ	L1	ML3	ML4	0	0	Ⓢ3	やや粗	灰（N4/0）	軟	不良	笵端痕跡残る（瓦当縁端より10mm）SD－03出土（2次調査）

表2　軒丸瓦観察表

No.	計測値（mm）				成形材	凸面	凹面	端面・端縁調整			胎土						焼成	備考
	全長	玉縁	広端幅	玉縁幅							石英	長石	チャート	クサリ礫	角閃石	雲母		
3	447	71	180	146	粘土紐	縄目叩　左撚 調整　ヨコナデ 玉縁　ヨコナデ	綴目　無 縦12本/cm横8本/cm	側端面　一部分割後未調整 玉縁端面　ヘラ切り？ 広端面　〃	側端縁　凸無 玉縁端縁凸〃 広端凸〃	側端縁　凹無 玉縁端縁凹〃 広縁凹〃	LⓆ3	LⓆ4	L3	0	0	S4	やや軟	
											色調　褐灰（10YR4/1）			やや密			瓦質	
4	423	72	170	125	不明	縄目叩　－ 調整　ナデ 玉縁　－	綴目　無 縦10本/cm横7本/cm	側端面　ヘラ切り？ 玉縁端面　〃 広端面　〃	側端縁　凸無 玉縁端縁凸〃 広端凸〃	側端縁　凹無 玉縁端縁凹〃 広縁凹〃	L2	M2	M3	M2	0	Ⓢ3	やや軟	
											色調　褐灰（10YR5/1）			やや密			瓦質	
5	－	69	－	146	粘土紐	縄目叩　右撚 調整　ヨコナデ 玉縁　〃	綴目　無 縦9本/cm横8本/cm	側端面　ヘラ切り 玉縁端面　未調整 広端面　－	側端縁　凸無 玉縁端縁凸〃 広端凸－	側端縁　凹ヘラケズリ 玉縁端縁凹無 広縁凹－	M2	L3	L4	Ⓠ2	0	Ⓢ1	やや軟	
											色調　灰（7.5YR4/1）			やや密			瓦質	
6	－	68	－	146	不明	縄目叩　右撚 調整　ヨコナデ 玉縁　ヨコナデ	綴目　無 縦9本/cm横6本/cm	側端面　一部分割後未調整 玉縁端面　未調整 広端面　－	側端縁　凸無 玉縁端縁凸〃 広端凸－	側端縁　凹ヘラケズリ 玉縁端縁凹無 広縁凹－	M3	MⓆ4	M2	0	0	S1	やや軟	
											色調　灰白（7.5Y7/1）			やや密			瓦質	

表3　丸瓦観察表

No.	計測値(mm) 全長	広端面	狭端面	成形材	凸面	凹面	端面・端縁調整	胎土 石英	長石	チャート	クサリ礫	角閃石	雲母	焼成	備考
7	388	—	254	粘土紐	縄目叩 左撚 調整 無	綴目 無 桶枠木幅26mm 調整 無 縦7本/cm横7本/cm	側端面 ヘラ切り 側端縁凸 無 側端縁凹 無 広端面 〃 広端縁凸 〃 広端縁凹 〃 狭端面 〃 狭端縁凸 〃 狭端縁凹 〃	S2	M2	M2	L3	0	Ⓢ1	軟	凸面に指圧痕有
								色調 浅黄(2.5Y8/3)				やや密		不良	
8	395	—	260	不明	縄目叩 左撚 調整 無	綴目 無 調整 無 縦7本/cm横7本/cm	側端面 ヘラ切り 側端縁凸 無 側端縁凹 ヘラケズリ幅10mm 広端面 〃 広端縁凸 〃 広端縁凹 無 狭端面 狭端縁凸 〃 狭端縁凹 ヘラケズリ幅13mm	SM2	S2	S1	Ⓛ2	0	S3	軟	
								色調 灰白(10YR8/2)				やや粗		土師質	
9	—	—	265	粘土紐	縄目叩 左撚 調整 無	綴目 無 調整 部分タテナデ	側端面 ヘラ切り 側端縁凸 無 側端縁凹 — 広端面 — 広端縁凸 — 広端縁凹 — 狭端面 — 狭端縁凸 — 狭端縁凹 —	M4	M2	M4	LⒸ2	0	Ⓢ1	軟	
								色調 浅黄橙(7.5YR8/3)				やや粗		土師質	
10	—	—	—	粘土板	縄目叩 左撚 調整 無	綴目 無 調整 部分タテナデ 縦10本/cm横12本/cm	側端面 ヘラ切り 側端縁凸 無 側端縁凹 ヘラケズリ幅12mm 広端面 — 広端縁凸 〃 広端縁凹 — 狭端面 ヘラ切り 狭端縁凸 〃 狭端縁凹 ヘラケズリ幅15mm	M2	M3	ML3	Ⓛ3	0	S1	軟	
								色調 灰白(5Y8/2)				やや粗		不良	
11	382	295	—	不明	縄目叩 左撚 調整 無	綴目 無 調整 不明	側端面 ヘラ切り 側端縁凸 無 側端縁凹 ヘラケズリ幅15mm 広端面 〃 広端縁凸 〃 広端縁凹 — 狭端面 〃 狭端縁凸 〃 狭端縁凹 —	M2	ML2	ML2	L2	0	S2	軟	
								色調 灰白(2.5Y8/1)				やや密		不良	

表4　平瓦観察表

No.	計測値(mm) 全長	幅	成形材	凸面	凹面	端面・端縁調整	胎土 石英	長石	チャート	クサリ礫	角閃石	雲母	焼成	備考
12	—	—	粘土紐	縄目叩 左撚 調整 部分ナデ	調整 無 縦8本/cm横8本/cm	側端面 ヘラ切り 端面 ヘラ切り 側端縁凸 無 広端縁凸 無 側端縁凹 ヘラケズリ(面取り) 広端縁凹 ヘラケズリ(面取り)	M1	ML2	L3	ⓁⒸⓁ	0	S3	やや軟	2次調査出土
							色調 黄灰(2.5Y5/1)				やや密		瓦質	
13	395	196	粘土紐	縄目叩 左撚 調整 不明	調整 無 縦7本/cm横8本/cm	側端面 ヘラ切り 端面 ヘラ切り 側端縁凸 無 広端縁凸 無 側端縁凹 ヘラケズリ(面取り) 広端縁凹 ヘラケズリ(面取り)	Ⓢ1	S1	M1	LⒸ4	0	Ⓢ3	軟	2次調査出土
							色調 にぶい黄橙(10YR7/4)				やや密		土師質	

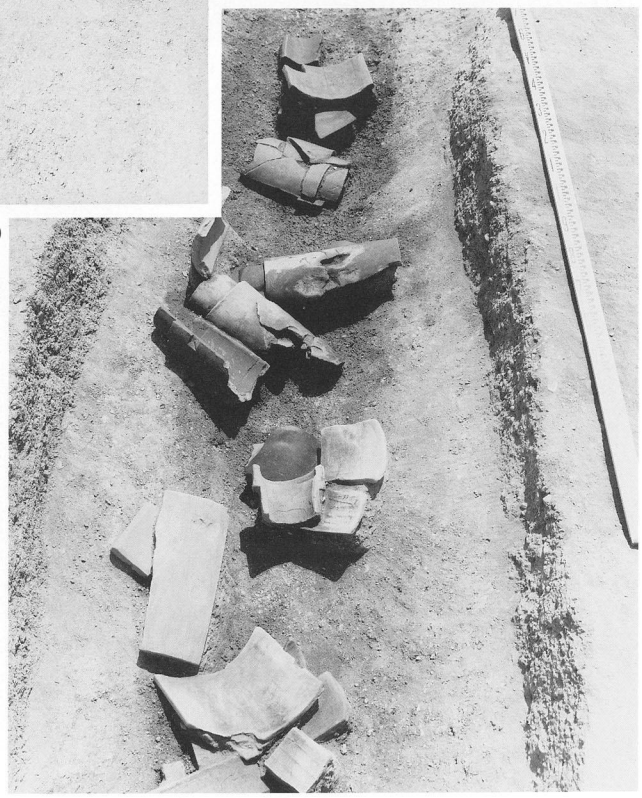
表5　面戸瓦観察表

No.	計測値(mm) 全長	幅	成形材	凸面	凹面	端面・端縁調整	胎土 石英	長石	チャート	クサリ礫	角閃石	雲母	焼成	備考
14	—	100	粘土紐	縄目叩 左撚 調整 無	綴目 無 調整 無 縦8本/cm横8本/cm	側端面 ヘラ切り 端面 ヘラ切り 側端縁凸 無 広端縁凸 無 側端縁凹 〃 広端縁凹 〃	ML2	L3	L2	M2	0	S3	やや軟	
							色調 明黄褐(10YR6/6)				やや密		土師質	
15	—	123	粘土紐	縄目叩 左撚 調整 ナデ	綴目 無 調整 無 縦7本/cm横10本/cm	側端面 ヘラ切り 端面 ヘラ切り？ 側端縁凸 無 広端縁凸 無 側端縁凹 〃 広端縁凹 〃	L2	ML3	ML4	L2	0	S1	やや軟	
							色調 灰白(5Y7/2)				やや粗		土師質	
16	—	115	粘土紐	縄目叩 左撚 調整 無 指頭圧痕有	綴目 無 調整 無 縦9本/cm横10本/cm	側端面 ヘラケズリ 端面 未調整 側端縁凸 無 広端縁凸 無 側端縁凹 〃 広端縁凹 〃	LⒸ3	LⒸ4	L4	L1	0	S1	やや軟	粘土紐継目明瞭に残る
							色調 灰白(7.5Y8/1)				やや粗		土師質	
17	—	148	粘土板	縄目叩 左撚 調整 無	綴目 無 調整 無 桶枠木幅 30mm 縦8本/cm横8本/cm	側端面 ヘラ切り 端面 ヘラ切り 側端縁凸 無 広端縁凸 無 側端縁凹 片側ヘラケズリ 広端縁凹 ヘラケズリ	M2	L2	M3	ML3	0	S2	堅	
							色調 灰白(5Y7/2)				密		須恵質	
18	—	101	粘土板	縄目叩 左撚 調整 端縁指 指頭圧痕有	綴目 無 調整 無 桶枠木幅 25mm 縦8本/cm横10本/cm	側端面 ヘラ切り 端面 ヘラ切り 側端縁凸 無 広端縁凸 無 側端縁凹 〃 広端縁凹 〃	M3	M1	M4	0	0	S3	堅	凹面に糸切り痕有
							色調 灰白(5Y7/1)				密		須恵質	

表6　熨斗瓦観察表

図　　版

1　SD－03上層遺物出土状況（東より）



2　同上　下層遺物出土状況（西より）

図版2　内山瓦窯第4次調査

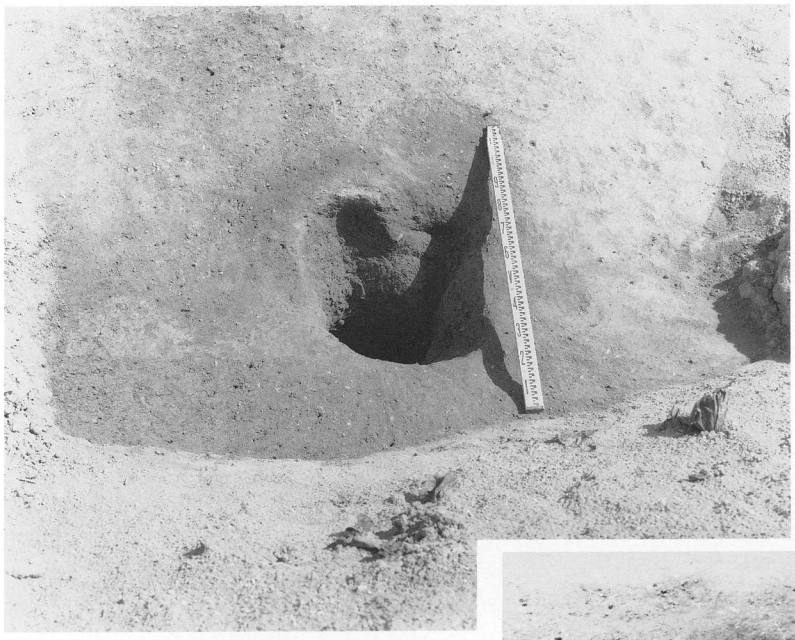
1　SD－03下層遺物出土状況（北より）

2　同上　完掘状況（西より）

1　3号窯上半部分検出状況（南より）

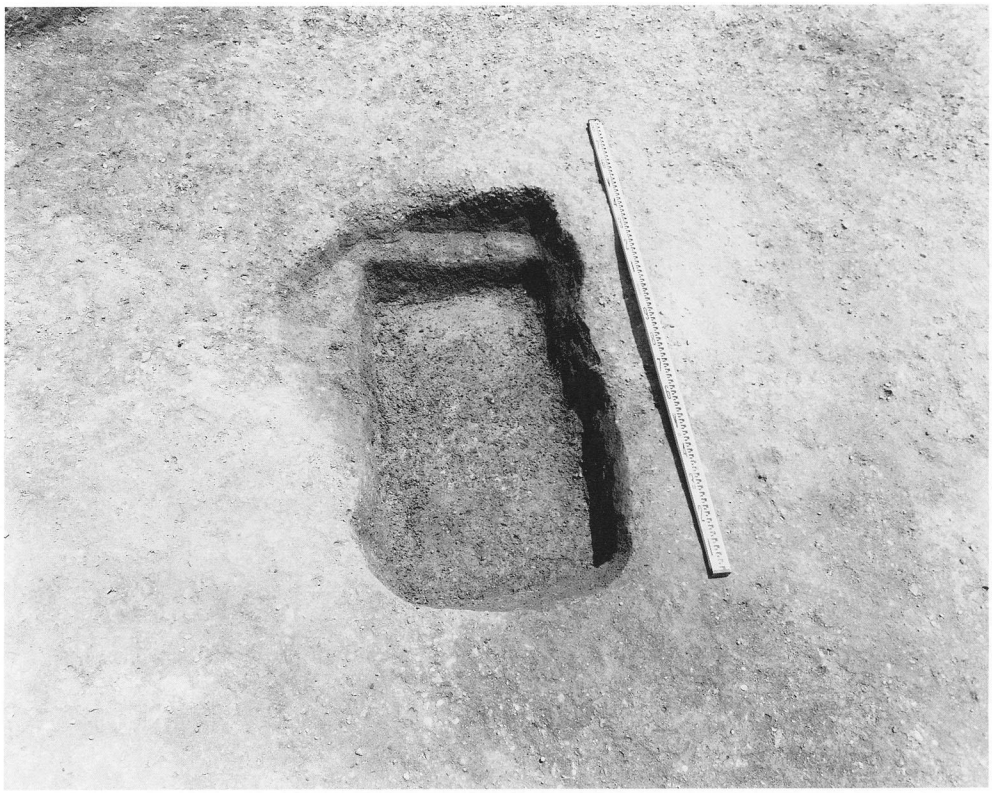
2　同上　焼成部階段の状況（東より）

図版4　内山瓦窯第4次調査

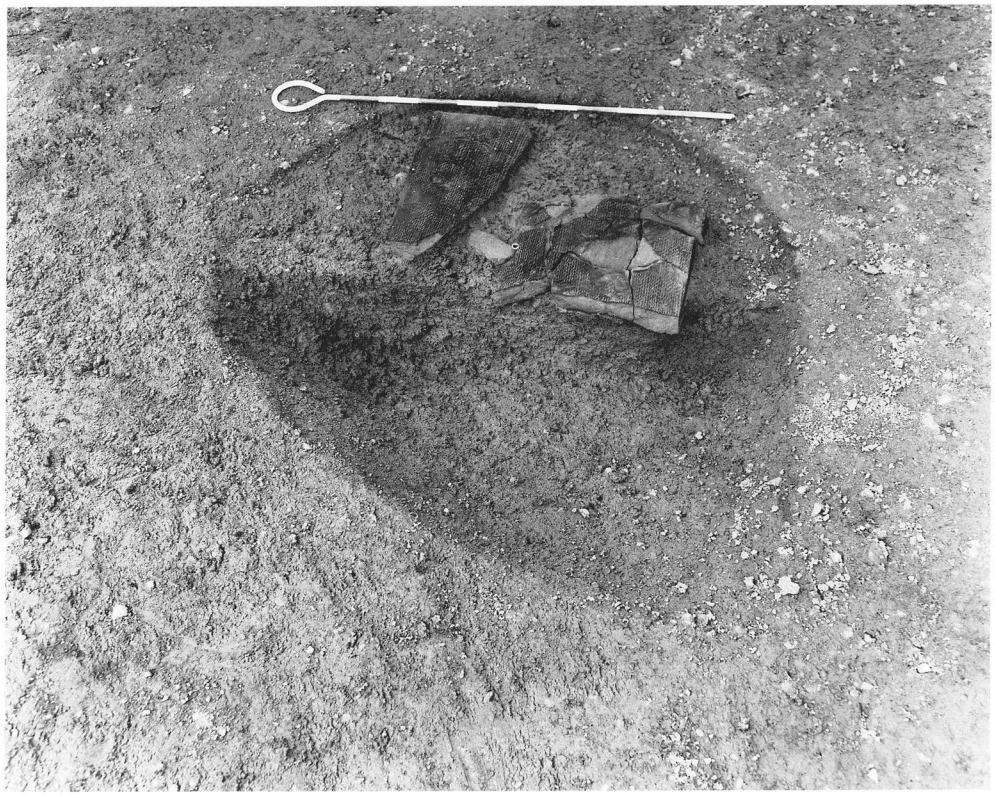


1　4号窯煙道周辺（南より）

2　SK－01完掘状況（北より）

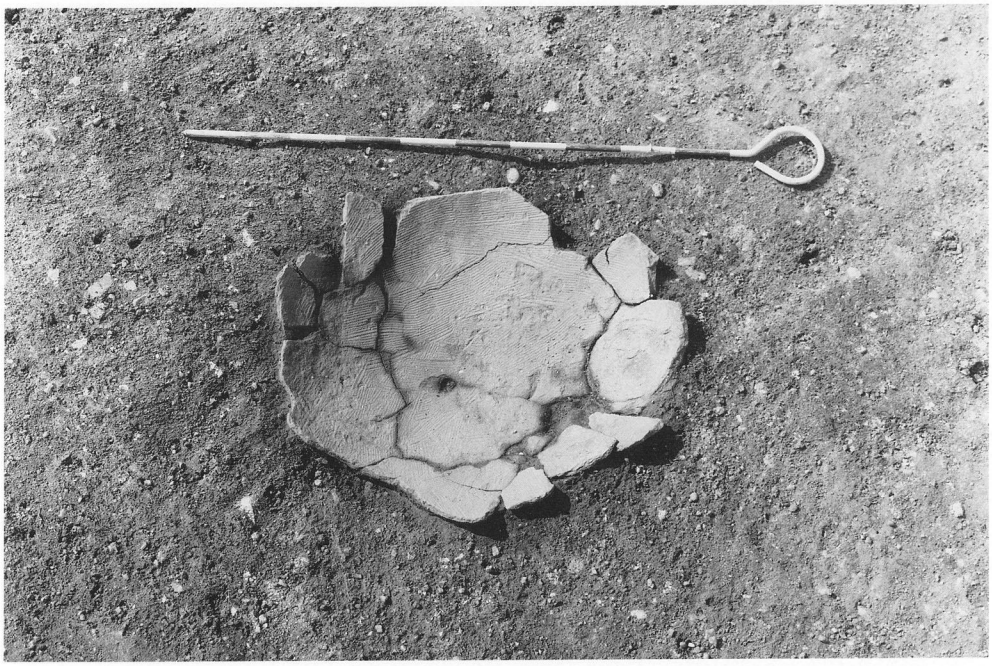


1　SK－02完掘状況（南より）



2　SK－04遺物出土状況（南より）

1　SK－06遺物出土状況（北より）



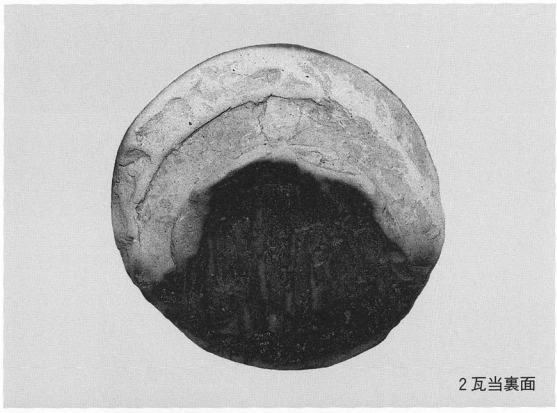
2　SK－07遺物出土状況（南より）

図版7　遺物（軒丸瓦）

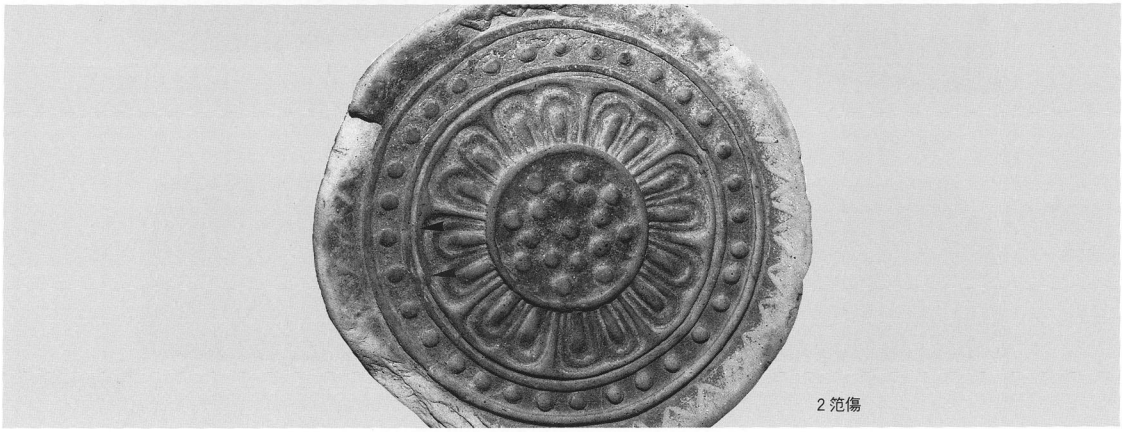
1 瓦当面

1 瓦当裏面

2 瓦当面



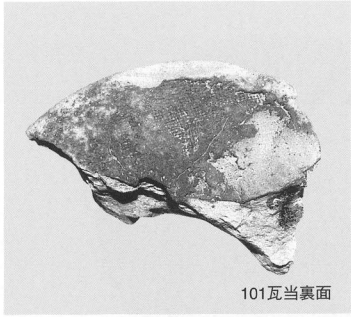
2 瓦当裏面



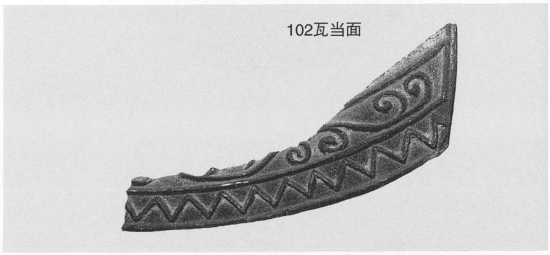
2 笵傷

図版8　遺物（軒丸瓦・軒平瓦）

101瓦当面

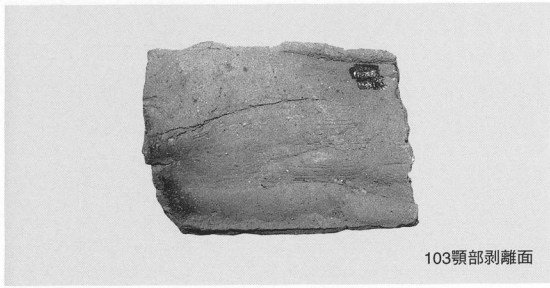

101瓦当裏面

101笵端痕跡


102瓦当面

103瓦当面

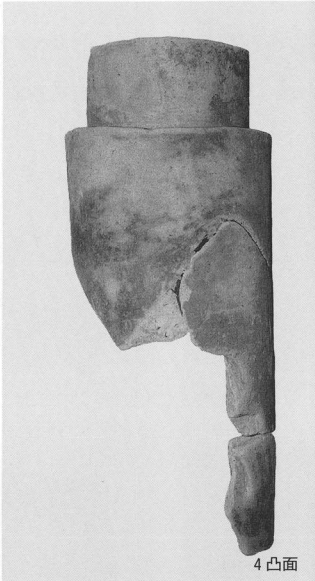
102顎部剥離面

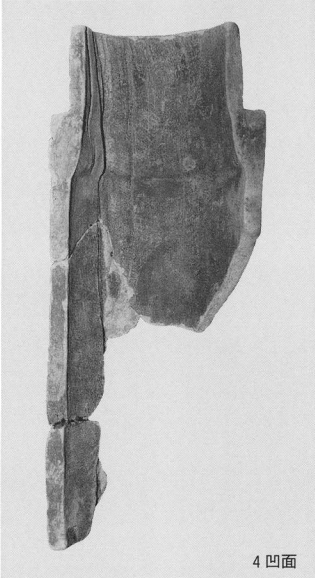

103顎部剥離面

図版9　遺物（丸瓦）

3 凸面

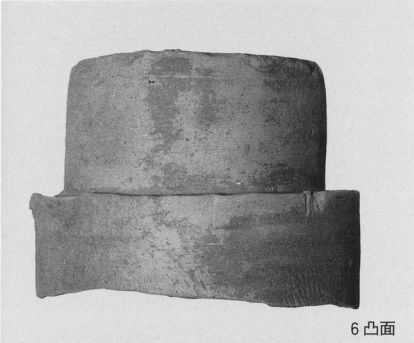
3 凹面


4 凸面


4 凹面

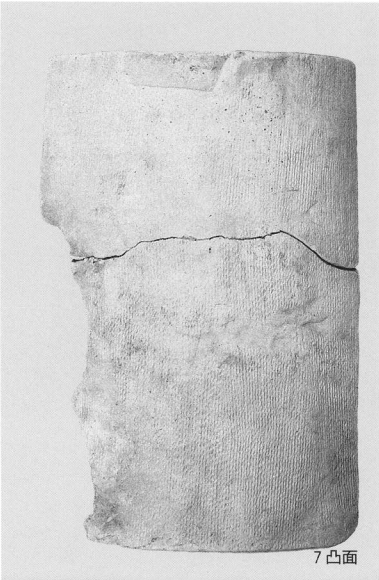
5 凸面

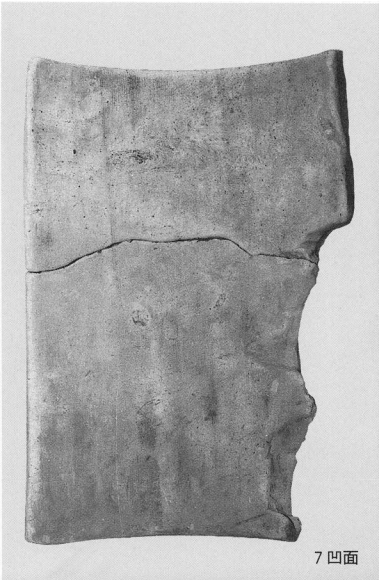
5 凹面


6 凸面

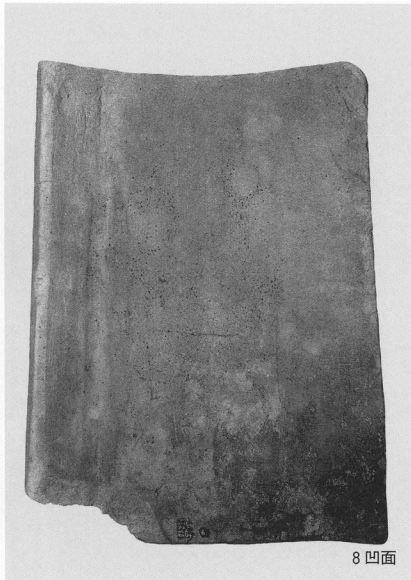
6 凹面

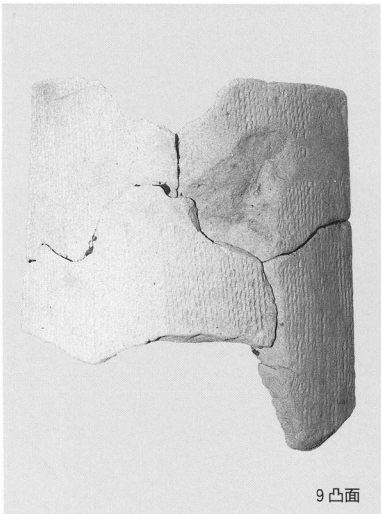
図版10　遺物（平瓦）

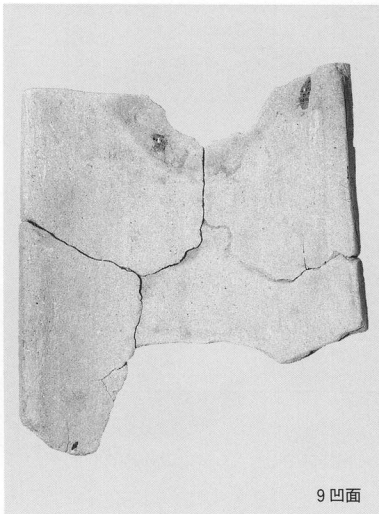

7 凸面

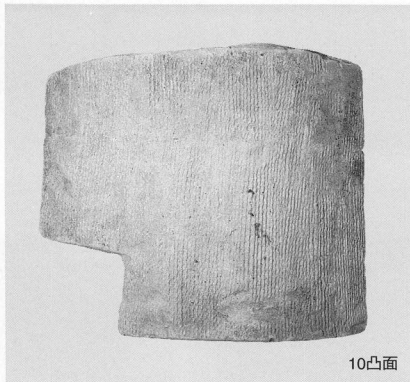

7 凹面

8 凸面

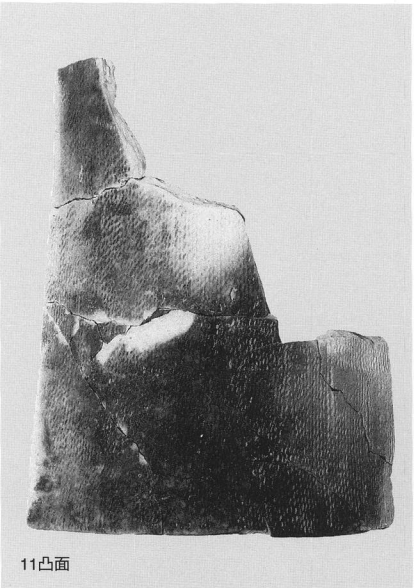

8 凹面


9 凸面

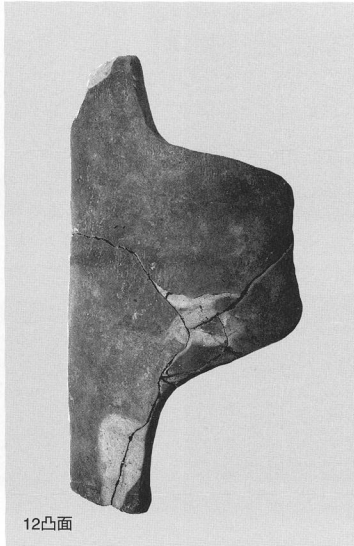

9 凹面

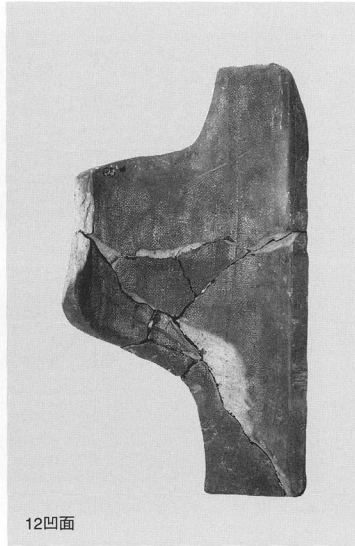

10凸面

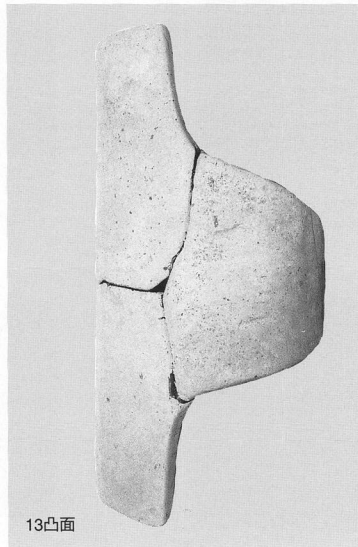
10凹面

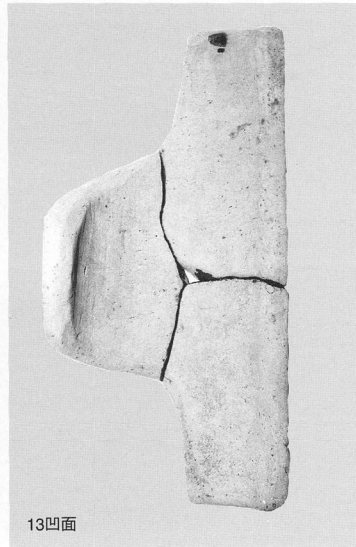

11凸面

11凹面


12凸面

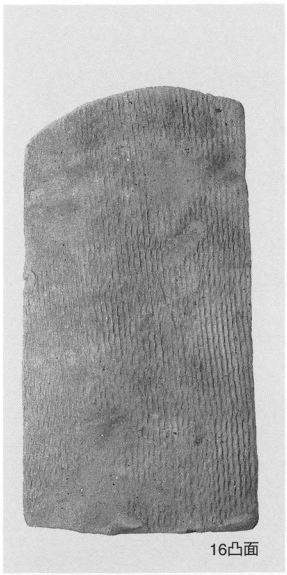

12凹面


13凸面

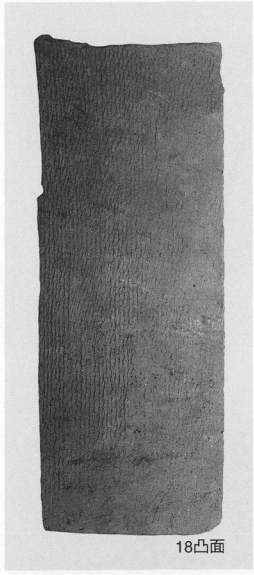

13凹面

図版11　遺物（平瓦・面戸瓦）

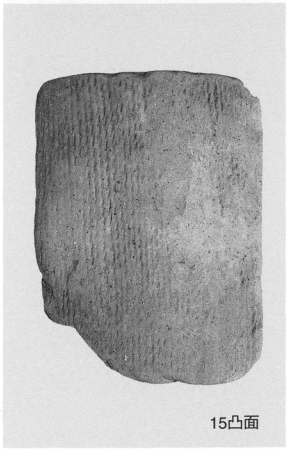
図版12　遺物（熨斗瓦）

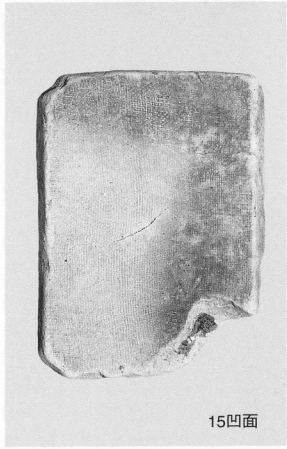

16凸面

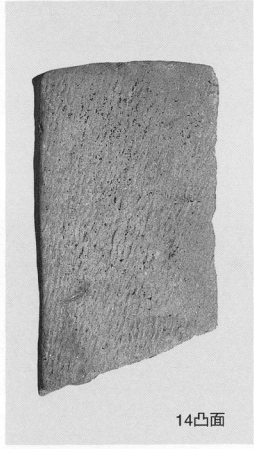
16凹面

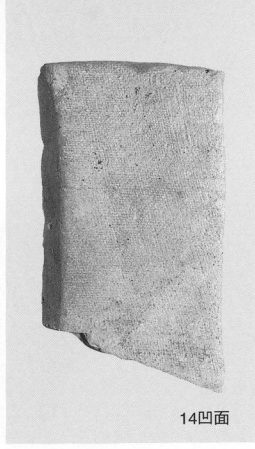

18凸面

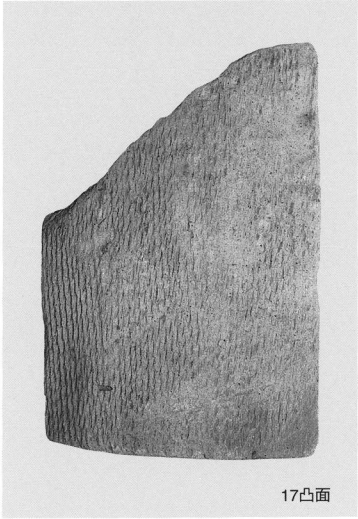
18凹面


15凸面

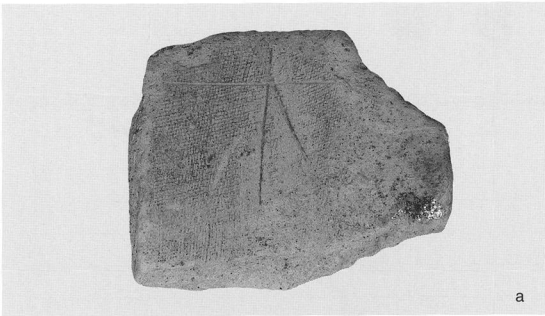

15凹面

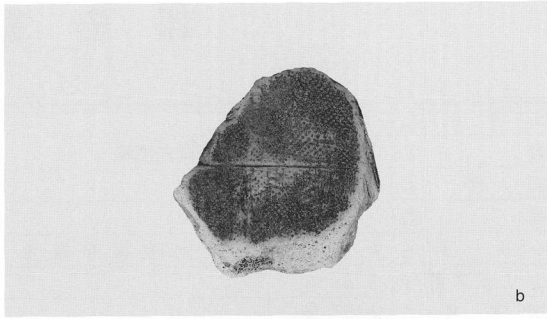

14凸面

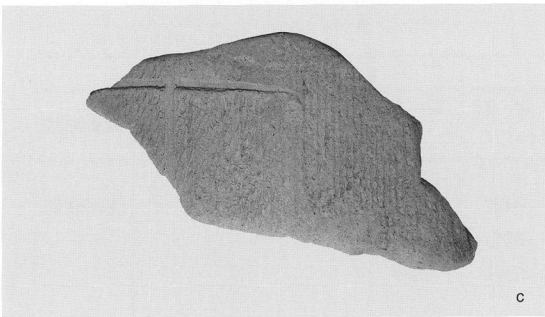

14凹面

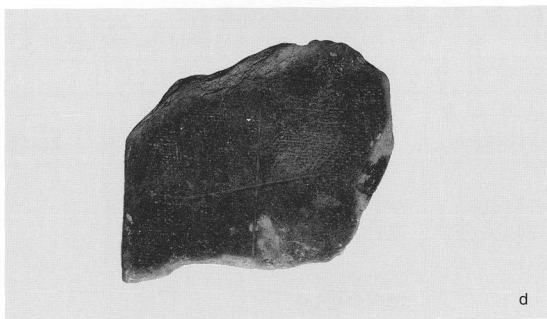

17凸面

17凹面

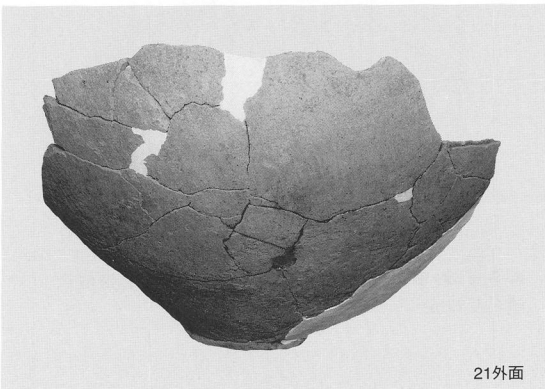

a

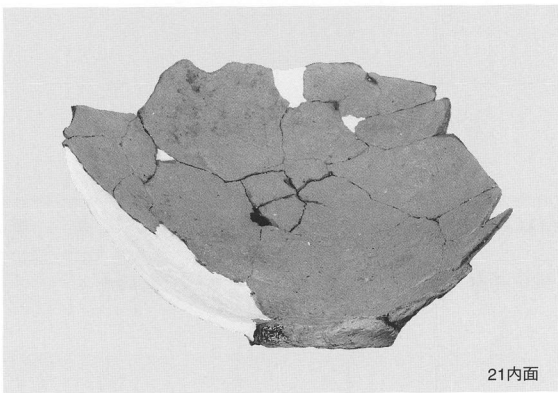

b


c


d

窯記号


21外面


21内面

報告書抄録

ふりがな	うちやまがよう
書名	内山瓦窯第４次発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	大和郡山市文化財調査概要
シリーズ番号	３５
編著者名	山川　均
編集機関	大和郡山市教育委員会
所在地	〒639-11 奈良県大和郡山市南郡山町５５４－１　TEL 07435-3-1151
発行年月日	西暦　１９９６年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
うちやまがよう 内山瓦窯	ならけん やまとこおりやまし 奈良県大和郡山市 にしたなかちょう 西田中町115	29203		34度 37分 59秒	135度 45分 21秒	19950724～ 19950831	570 m²	範囲確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
内山瓦窯	瓦窯	白鳳	瓦窯２基ほか	軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦 道具瓦ほか	藤原宮所用瓦焼成窯

大和郡山市文化財調査概要　35

内　山　瓦　窯

第４次発掘調査概報

平成８年３月31日

編集・発行　大和郡山市教育委員会
大和郡山市南郡山町554－１

印　　刷　明新印刷株式会社
奈良市南京終町３丁目464番地